

アジアと女性解放

Asian Women's Liberation

アジアの女たちの会

連絡先：
東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号 400円



ロンに衣裳を借りてタイ航空の売春促進キャンペーンに
特別出演中のヤス

特集・侵略と性

- 基地買春
— 沖縄・韓国・フィリピン・タイ —
- 従軍慰安婦
- 輸入される女性たち
- バングラデシュ売春レポート
- アジアの女性運動から



No. 14

1983. 8

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして!

侵略と“性”

—沖縄・韓国・フィリピン・タイ—



●アメリカの軍事戦略

私は佐世保の近くの小さな村で生まれ、少女時代を高度成長以前の横須賀で育った。裏山からは米軍基地が見渡せ、「パンパン」とか「オンリ」とか呼ばれた基地の女性の存在は日常生活の風景だった。米軍によって日本の女性の人権が踏みこじられていることは、私の幼いナショナリズムをいたく傷つけ、その怒りがアジア各地の買春観光地帯へと足を向けさせている。そしてこれらの地に共通する一つの事実と出会った。それは朝鮮戦争、ベトナム戦争といった米軍のアジア侵略に連動して、兵士の慰安所R&R(レスト・アンド・リクリエーション)センタープログラムが生まれ、買春地帯が新しくつくられたり、肥大化させられ、米軍の撤退後は、買春観光地帯となつていくことだった。そればかりか、今なお米軍が行くところには、必ず基地の女たちがいる。昨年の春から夏にかけて、フィリピン・タイ・香港の基地買春地帯を訪れ、買春の盛衰が米軍のアジア戦略と軌跡を共にしていることを見た。

五〇年代Ⅱ「大量報復戦略」、六〇年代Ⅱ「柔軟反応戦略」を採用したアメリカの軍事戦略は、ベトナム戦争の敗北をたてなおそうと七〇年代に向けて「ニクソン・ドクトリン」を発表。この戦略の基本路線は、全面核戦争の優位を保ちながら、第三世界が共産主義陣営にはならないように民族解放運動を圧殺し、軍事負担を同盟諸国へおしつけていくこととするものだった。SALTⅠの交渉と中国への接近によりソ連の封じこめをはかる一方で、民族解放運動に対してはアメリカ地上軍にかり、現地の軍隊・警察力を育成して「アジア人とアジア人を戦わせる」政策をとった。この戦略に沿いアメリカ地上軍は撤退を開始し、七一年には第七艦隊をふくめ四五万だった在アジアの兵力は、七四年には一六万に減少した。同時に、アメリカは同盟諸国に対し核のカサともいえる海軍力を強化することにより緊急の場合はいつでもかけつけて支援する体制をととのえた。先端技術を装備した戦艦を建造し、横須賀—沖縄—ミクロネシア—フィリピン—ディエゴガルシアと極東から中東まで太平洋の島々を弧状

に結ぶ基地群の増強、新設をおこなった。これらの基地は、兵力三万—八〇〇人、航空機二二〇機を搭載する世界最大の海軍力Ⅱ第七艦隊によって使われている。第七艦隊は各国の通信施設と連絡をとりながら、西太平洋、インド洋、ペーリリング海、南極大陸までパトロールして、何か事がおきたら核をつんだ爆撃機が飛びたつシステムができていく。

●基地の街—オロンガポ

ベトナム戦争が拡大され、アメリカ兵が大量にアジアにやってくる。兵士の慰安のためにR&Rセンターが、ベトナム・タイ・フィリピン・韓国・台湾の各国に設けられた。兵士たちは激しい戦闘の後、短期間の休暇を楽しむため、軍用機でこれらの地に空輸されアジアの女性の肉体に束の間の快楽をもとめ豪快にドールを落した。R&Rセンターの中心だったサイゴンには、四〇万の売春婦がいたという。一—三ドルで体を売ったのは、「戦略村政策」により村を追われ、サイゴンにやってきた貧しい農村の女たちだった。

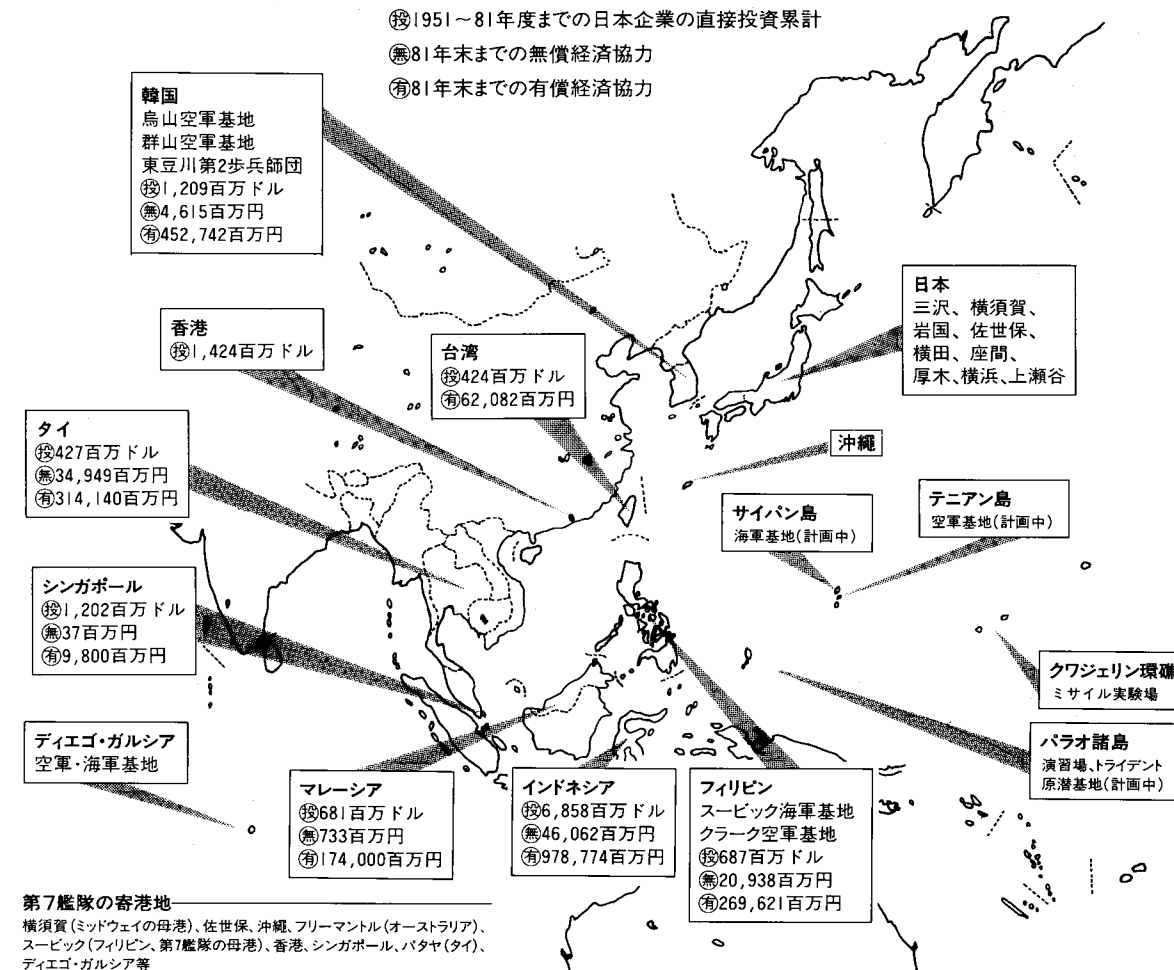
戦争の終結によりベトナムから基地買春はなくなったが、第七艦隊の母港・スービック海軍基地のR&RセンターⅡフィリピンのオロンガポはアジアで最大の基地買春の地だ。

基地の女たち

遠野はるひ

主な米軍事基地と日本の経済侵略

①1951~81年度までの日本企業の直接投資累計
②81年末までの無償経済協力
③81年末までの有償経済協力



基地・観光買春を許すな!!

軍事・経済侵略と女性への性的搾取はコインの裏・表である。それをもっとも端的にあらわしたのが侵略戦争と買春だ。かつて日本軍がアジアの女性を従軍慰安婦としたことはあまりにも有名だが、アメリカ軍もアジアへの侵略とともに基地買春をおこなった。そして今日も、アメリカ軍がいくところでは、必ず様々な形の女性への性的搾取が存在する。

ベトナム戦争後、基地買春地帯は観光買春地帯となった。買春観光が目にあまるようになったのは70年代初めからだが、その軌跡は日系多国籍企業のアジアへの経済侵略と一致する。買春は米軍兵士から日本の企業戦士へとひきつがれた。

買春は多様化しより巧妙になっている。国境を越えアジアの女たちはやってくる。「輸入される女たち」の背後には、貧困と工業化政策のために外貨を必要としている母国がある。女たち、それも一番貧しい女たちが、日米そして自国の支配階級の犠牲にされ、同時に軍事・経済侵略をささえている男たちへの貢ぎものとして利用されている。

買春は目にみえない軍事・経済侵略の矛盾が目に見えるものとして表出してきたものだ。アジアの女性への性的搾取と日本の女性に加えられている家庭基盤充実政策・労基法改悪・優性保護法改悪などの根は一つだ。私たちはこうした反動政策を阻止するとともに、アジアの人々と連帯し、基地・観光買春を根絶するために闘っていきたい。

1983年8月

アジアの女たちの会

基地のゲートから小さな川をへだてて、ゴーゴーバー、ナイトクラブ、マッサージパーラー、ホテルなど五〇〇軒がギッシリと並ぶ。日暮れると基地から街へと、ジーパンにTシャツのアメリカ兵がやってくる。ロックのリズムと幼さの残る女たち、ビール一杯で相手を物色する男たち。基地買春の典型的な光景が毎晩くりひろげられる。オロンガポには、週一回の性病チェックとひきかえに市からライセンスをもらっているホスピタリティーガールと街娯合わせて一万七千人の女たちがいる。彼女たちの故郷は、フィリピンでも一番貧しいレイテやサマール。一晚三千、四千円で体を売る。オロンガポの経済は、こうした女たちによって支えられる性産業と、二万人のフィリピン労働者が働く基地の落すドルによりかかっている。

スービック海軍基地は、アメリカがアジアへの侵略をエスカレートするとともに規模が大きくなり、それにもないオロンガポも繁栄していった。特にベトナム戦争がはじまると、二〇軒だったR&Rセンターが、フィリピン女性をアメリカ兵から守るという口実のもとに、急激に増え六〇〇軒にもなった。今でもその勢いがおとろえないのは、米地上軍のアジアからの撤退後も、第七艦隊の

母港としての機能はかわらないためだ。中東情勢が緊迫するにつれ、この基地の重要性はさらに高まり、アメリカは七九年に基地使用の再契約を結び、使用料として五年間五億ドルを払い、さらに二億五千万ドルの軍事援助を与えることを約束した。オロンガポは日本とも無関係ではない。買春観光客はここまでやって来るし、日本の建設会社は基地建設を請け負い、川崎重工の造船所は基地に隣接している。

●米軍撤退後に——コラート

ベトナム戦争当時、タイ最大の米空軍基地のあったコラートはオロンガポと対照的だった。コラートはタイで一番貧しい東北地方の入口に位置する。こわれたネオンサイン、はげかけたベンキ、かつてはバーやマッサージパーラーとして営業したと想像される多くの店は閉められ、広く立派な道路の両側に並ぶ。米軍の置きみやげのこの道路には車も人影もなく、炎天下をサムロがゆうゆうとゆきかう。静かな農村に、アメリカ文化というより基地特有の消費文化が洪水のように押し寄せ、それが引いてしまった跡——廃墟のような印象すらうける。廃墟は街だけではない。広大な基地はタイ空軍へと引き渡されたが、使われることもなく雑草

がおいしげっていた。さびついた巨大なレーダーが、一〇〇機の爆撃機が連日北爆へと飛び立っていったという昔日をわずかに思いおこさせる。ここにいた女たちの多くは買春観光客をもとめてバンコクやパタヤへと南下し、街に残った女たちはタイ兵士やバンコクから流れてくる買春観光客を相手に働いている。ひとときわ目立つマッサージパーラーの名前が、「銀座」「大阪」ということが、日本人の存在の大きさを物語る。

基地の街の凋落は、タイ全土の基地の街に共通した宿命である。アメリカ軍は、タイのSEATO加盟を機に駐留するようになり、ベトナム戦争時には四万人もいた。北爆の拠点であった米軍基地は、みるべき産業もない東北地方の貧しい農村に急激な繁栄をもたらした。戦争によるドルの流入がいかにすごかったかは、例えば六つの空軍基地を建設するため五億ドルが払われたことでもわかる。そして繁栄は、一つの基地に一人近いくらいといわれた売春婦たちがささえる性産業によりかかっていた。バンコクはR&Rセンターの中心となり、買春観光地帯として有名なパッポンはアメリカ兵を客としてできた。

ベトナム戦争が終結の道を歩みはじめた頃、タイの反米闘争は盛りあ

タイのパタヤビーチ



がり、学生革命後の七五年に、頂点に達した。こうしたタイ国内の要求と戦略の転換から、七六年にわずかな軍事顧問を残してアメリカ地上軍は撤退した。この撤退により、基地の街はまた貧しくなったが、一度あげてしまった生活水準をもとに戻すことは困難で、人々はバンコクや中東へと出稼ぎにでている。全国で七〇万いるといわれる売春婦の故郷が東北地方なのは、貧困のせいばかりでなくこうした背景とも関連しているように思われる。基地とR&R産業は地方経済の構造ばかりか国全体の経済構造もかえた。

撤退したとはいえ、アメリカ軍がまったくタイと関係なくなつたわけではない。特にインドシナ紛争後、米軍はタイを最前線基地として位置づけ、タイ海軍と第七艦隊の共同演習をおこない、多額の軍事援助や最

新式の武器を供給している。タイ政府は七八年に四億ドルの武器をアメリカから購入したが、これは観光によつてもたらされた外貨にほぼ匹敵する。観光は売春を目玉としているので、タイ女性が体を売って得た外貨がアメリカに支払われ、タイの軍事化をますます強化しているともいえる。

●第七艦隊の寄港地

タイには、依然として形を変えた基地買春が存在する。あらゆるデカダンスに満ちたパタヤは、買春観光のメッカとして名高いが、第七艦隊の寄港するR&Rセンターでもある。兵士たちはオロンガポより、もっと多くの物と美しい女性を買えるパタヤは「夢の島」だという。入港後の二、三日、米兵はドンチャン騒ぎをくりひろげ、ミッドウェーが五日間

寄港するとパタヤには一〇〇万ドル以上が落ちる。バーで出会った女たちは、一週間後に再びやって来るというミッドウェーを心待ちにしている。

第七艦隊の寄港地はアジアの各地にある。香港のワンチャイもその一つだ。ベトナム戦争の時できたバー街はさびれてはいるが、ここでアメリカ兵の相手をしているのは、香港とフィリピンの女たちだ。太平洋のクアジェリンでは十一才の女の子がアメリカ兵に体を売り、スリランカ、オーストラリア、韓国そして沖縄・横須賀と第七艦隊の行くところには、どこでも基地買春がある。買春の形態はそれぞれの国の経済・社会情勢を反映しているものの、アジアの女たちが性的に搾取され、アメリカの軍事支配をささえるために利用されていることは同じだ。

ベトナム戦争におくられる新兵は、人を殺すことに良心の傷みを感じなくなるよう訓練をうけ、アジアの女性を抱くことはこうした非人間化の中にセットされていた。そして今でも、階級・管理支配の軍隊生活からうける抑圧をたまに寄港するオロンガポやパタヤの女たちの上に発散させる。オロンガポにあったホテルの名は「ブルー・ヘイブン」。「人魚」の絵がどこの買春地帯でも目についた。

男たちにとってアジアにおける買春は、故国の実生活とは離れた何をしてても許される「天国」で「人魚」と戯れることなのだ。

買われる側の女たちは、騙されたり性病に体をむしばまれたりしながら、貧しさから脱却する道としてアメリカ兵と結婚することを夢みる。「結婚」の後ろにあるのはアメリカの「豊かさ」だ。しかし結婚という実生活の中の破局。買春についてまわる、麻薬、性病そして国際児の問題は、どこでも深刻だ。アメリカ軍やそれに追従する現地の支配階級は、軍事支配の底辺をささえる兵士や女たちを巧妙に管理している。

軍事支配がもたらすものは、ただ核や戦火の脅威だけではない。現地の社会・経済構造、文化までが変えられ、女たちが性的に搾取されるのだ。

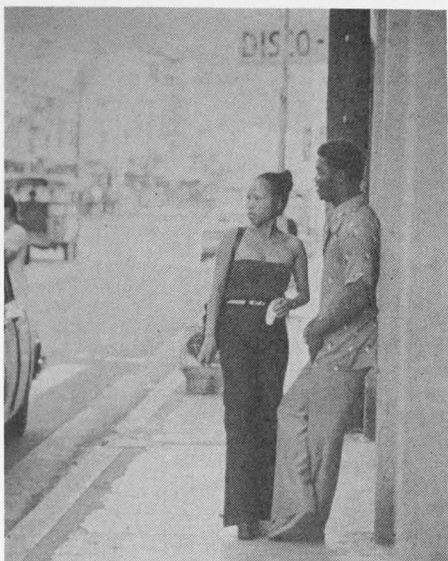
●基地買春から観光買春へ

日本は、朝鮮・ベトナム戦争の特殊な需要をテコに経済発展をとげた。ベトナム特需によつてどのくらいドルが日本に流入したか正確な統計はないが、ある推計によると七〇年一年間で、十億ドルが日本にもたらされたという。七〇年代、高度成長が終った日本経済は、様々な矛盾を海外に転嫁してのりきろうと、日系多

国籍企業による海外進出が促進された。アジアを主な投資先に、七二年〜七三年には第一次投資ブームがおきる。石油ショックを切り抜けた後、海外投資は製造業から資源収奪を目的とする大型プロジェクトへと内容を変え、国がリーダーシップをとり企業間で協力するという国家的な色合いを深めている。ちなみに、八一年までの海外投資残高は四五億ドル。七一年の四四億ドルから十年間で約十倍となった。進出が、繊維・家電といった目にみえるものから、より相手国の内部にはいりこみながら人目につかないアメリカ型多国籍企業へと変質しつつ、アジアは日本経済の構造の中にガッチリ組みこまれていつている。日本帝国主義がより成熟しつつあるのだ。

アジア各国における日系多国籍企業の利害が大きくなるにつれ、軍事支配は避けがたくなっていく。日本が軍拡をすすめているのは、アメリカに要求されているからだけではなない。日本資本主義の利益を守るために日本自身が必要だからだ。経済侵略と軍事侵略はわがちがたく結びつく。

強くなった円と観光の大衆化は、同時に性侵略Ⅱ買春観光をうみだした。最大限の利益を追及する企業のために酷使されている企業戦士たち



オロンガポの路上で

は、そのストレスをアジアの女性の体で解消し、さらに有能な社員として働く英気を養う。行く先は、かつてのR&Rセンターの地、韓国・台湾・フィリピン・タイ。アメリカは日本に同盟国としての責任を果せという。少なくとも買春に関するかぎり、日米安保は守られ、米軍兵士から日本の企業戦士へとひきつがれていった。さらに、日本の軍拡がこのまま進められれば、基地買春地帯に自衛隊員が行くのもそう遠いことではないだろう。実際、横須賀のドブ板通りは、アメリカ兵にかわり自衛隊員が上客となっている。

●アジア各国の観光政策

買春観光にえられる側にも観光を促進しなければならない諸事情があった。ベトナム戦争と前後して、アジア各国は工業化政策をスタートさせていた。七〇年代初めにベトナム戦争の終結と石油ショックにみまわれた各国は、工業化に必要な外貨を得るために、煙突のない産業として観光に注目した。まず中進国の韓国、台湾で、つづいてフィリピン、タイで観光促進は国策となり、それぞれ外貨獲得の上位にランクされている。観光の目玉は売春。買春観光にえられる国の中でも、一番貧しい女たちが外貨獲得の犠牲にされている。各

国の工業化政策、軍事化をして「売春観光」政策は同時にすすめられているのだ。

買春は、買う側、先進諸国、買われる側、第三世界といった単純な構図ではもはやとらえることはできない。アジアの買春地帯には、中進国として力をつけてきた韓国、香港、シンガポールの男たち、さらに資源国家であるマレーシアや中近東の男たちの姿を目にする。女性への性的搾取は、第三世界をもふくむ軍事・経済の侵略地図と重なり合い、その地図はますます複雑になっている。

日本の女たちが右傾化政策の中に組みこまれようとしていることと、アジアの女たちが日米、アジアの支配階級の経済・軍事支配のために利用されていることは一つの根から出てきたものだ。基地・観光買春は、目にみえないこうした支配の構造による矛盾が、目にみえるものとして表出したものといえる。私たちは国内で女たちに加えられる反動政策に抗うとともに、アジアの各地で反安保・反核・反基地・反買春を闘っている人々と連帯してゆきたい。



オロンガポで出会った女たち

マニラからバスで二時間半、オロンガポへ。入江一つ隔てたバロヤビーチのニッパハウスに泊まる。目の前に広がるスービック湾は遠浅の静かな海で、対岸にはスービック米海軍基地がみえる。遠くに浮ぶグラナデ島には米軍のオフィスがあり立入禁止。その上をひっきりなしに米軍のジェット機が飛び交う。基地がなければほんとうのどこかよい所だ。スービック湾の夜。ライトに照らされた夜の米軍基地は、まるでアメリカのSF映画に出てくる宇宙ステーションのようだ。基地の正門（ゲート）前からまっすぐのびるマングサイサイ通りは、通称「ゲート」と呼ばれ、バーやディスコ、ナイトクラブがひしめき合う。買春観光で有名なマニラのマビニ通りより、数倍もにぎやかだ。ゲート近くのディスコに入る。ステージでは生演奏に合わせて、ビキニ姿の若いフィリピン女性たちが腰をくねらせ踊る。にこりともしない。客は米兵と川鉄ドックの日本人。一番後ろの席に何人も女性が控えており、客に指名されると連れだつていく。売春だ。

ナイトクラブで出会ったマリイは日本に何度か出張にきたことがある。二八才。六つになる男の子を彼女の母親の住むビサヤに残し、仕送りをしている。日本では、柏崎、名古屋、茨城などを転々としており、たとえどしい日本語で「イバラギノママサン、イヒヒトネ。ダカラ、ママ

タイキタイ」という。実際、オロンガポで売春するより、日本で売春するほうが、何倍も稼げる。この店ではただ座って客の相手をしているだけでは、一銭にもならない。一晩に何人も客をとつても、彼女の手に入るお金はわずかなので、生活は苦しいという。それでも笑顔はたやさない。この店のオーナーは中国人でママと呼ばれる中国人女性が入口のところで、ときどき指示をしている。今日から「ゴードンサー」という若い二人は、まだあどけなさが残る。何を聞いても、キヤッキヤツと笑いながら、はずかしそうに答える。店の中には、花を売る女性もいる。何よりも驚いたのは、ゲート前の橋の下に女性たち。七、八人の若い女性がそれぞれ小さなボートに乗りおそろいのピンクのドレスを着て並んでいる。橋の上には呼び込みをする女性が一人。橋を通る米兵がコインを投げると、手に持った網でそれを拾う。アメリカとフィリピンの関係を象徴するようなこの光景を私は忘れることができない。

売春婦から花売りまで、オロンガポには様々な職業があるが、人々の生活は基地と無関係ではありえない。フィリピンでは最近、ABC（反基地連合、NFP（非核フィリピン連合）などにより、反核・反基地運動が盛り上がりつつあるが、その中でも基地売春は深刻な問題として取り組まれている。（伊藤みどり）

沖縄の基地と売春

●戦後から復帰まで

15万人の沖縄県民の死を巻き添えに、日本で唯一の戦場と化した沖縄は、廃墟と混乱と広大な軍事基地との同居の中で戦後を生きてきた。県民の生活は貧しさとの闘いであり、こうした状況の中から自然発生的に米軍相手の基地売春が出現した。女性たちは、二七年間の米軍支配の下、日本本土で制定された売春防止法に守られることもなく前借金（がらみ）の管理売春で、米軍による性的搾取と業者による経済的搾取と何重もの抑圧状況下に置かれた。

一九六九年の調査では、売春を専業としていると思われる者の数は七三六二人だが、実数はこの約二倍と推定されている。この実数によれば、全沖縄女性の売春可能年齢（十代半ばから六十代前半）の三〇人に一人が売春をしていることになる。基地経済に依存する沖縄経済は、基地売春の存在を無視することができない。ある人の計算では七二年当時、このセックス産業は、沖縄の基幹産業である砂糖、パイナップルをしの

ぐ最大の産業だったという。ベトナム戦争は狂乱景気を基地の町にもたらした。米兵相手の「Aサイン」のバー、クラブ、レストランは、全盛期、全島で一〇〇軒以上あり、夜の町は米兵達の撒きちらすドル紙幣が乱舞した。

七二年五月十五日、祖国復帰と同時に施行された「売春防止法」は、前借金と過酷な管理売春からの解放を多くの女性にもたらした。しかし、法的規制が有効となっても、基地存続に変わりなく、また、復帰時のドルショックで経済は不安定となり、女性たちの多くが新たな売春状況に身を置かざるを得なかった。最近、沖縄市のAホテルが売春防止法違反の場所提供容疑で摘発された時、列を作って順番を待っていた買春客の米兵は、翌日から「チームスピリット82」の米韓合同演習に参加する米兵達であった。

●基地の落とす暗い影

基地は様々な傷あとを今なお人々に残す。基地売春と精神障害の相関関係に

高里 鈴代

ついで医学的、社会学的に調査研究されたものはないが、県立婦人保護施設の入寮者の中で、長期にわたる売春歴を持つ者に精神障害者の占める率は高い。

又、四〇代、五〇代となっている現在、精神障害の故に生活保護を受けながら、今なおかつての生活の悪夢に苦しめられている女性たちもいる。かつて米兵相手の売春で、今は妄想、幻覚に苦しむAさん（四三才）は、「私は二十一才の時から人間じゃなくなつたのよ」と吐き捨てるように云う。Bさん（五三才）は、毎晩数名に強姦される妄想で一定の場所に安住できず、転々と民宿などを泊まり歩いているが、米人住宅の一軒を無償でもらいたいという。あの人たちが私をこんな人間にしたんだから一軒ぐらいくれてもいいでしょう！

「基地」が問われる時、基地に密着して生きざるを得なかった女性たちの今日の姿を見出すことは出来ない。

●フィリピン女性の導入

ベトナム戦争終結、沖縄の施政権返還を経て、米軍基地の軍事目的及び機能は再編成され、基地機能はむしろ強化されながら、基地経済そのものは確かに弱体化した。米兵相手に繁栄した歓楽街のAサインバー等も転業者が相次いだ。しかし、復帰後も3万人余の米軍、軍属が駐留し、その大半が沖縄本島中部の基地に在る現在、やはり若い兵士たちの受け皿が必要とされた。この状況に対応するため、安い労働力、フィリピン女性が導入され、基地の街の経済が再構築されている。旧コザ市のB・Cストリートや金武市のクラブのほとんどの店に、バンドを組んだり、ダンサーとして働くフィリピン女性



米兵に連れ添って基地内に入る日本女性（キンザー南ゲート）

復帰と売春防止法

新里智子

混血児で三〇代半ばになる知りあいがいる。彼は今でも自分の母親に「何故、自分を生んだのだ」と責める。小さい頃から、親せきですらも彼を「アメリカ」とののしる。彼が一〇代半ばの頃怒りて目に涙をい

つばいたため、私の父親に泣きついてきた光景は、幼い私にはあまりにも衝撃的で、今でも忘れられない。

彼は一〇代後半まで祖母の養育をうけた。狭い排他的地域社会で、特に沖縄の場合反米感情が強く存在する中で、いじめられ、さげすまれながら少年時代をすごさねばならなかった。母親は、年老いて彼のもとへ帰ってきたが、少年時代のくやしさが彼をそのような言動にはしらせる。

沖縄には三、五〇〇人以上の混血児がいるといわれ、その八〇％が母子家庭である。

戦後の混乱期に、米兵の強姦によっても混血児が数多く生れた。三〇数年たっても、母親と混血児の心はいやされていない。

六〇年代後半、いわゆる「ハーニー」とか「オンリー」とか蔑視されながらも、売春によってしかその日の糧を得ることのできなかった女性

たちが、基地の周辺の民家を間借りしているのがよく見られた。その中には、法的に結婚しているものもいたが、「現地妻」もかなりいた。彼女らの学歴は中卒が最も多く、職業はホステスや、無職の場合が多い。

沖縄では売春防止法が本土より一六年遅れ、七二年に適用された。それまでの「売春」対策は、「婦女に売淫させた者等の処罰に関する立法更生、罰則規定」の施行が七二年まで延ばされてきたため、「管理売春」とそれにまつわる前借金が公然と行われていた。売春婦と思われる者は一万余人、その三八％が那覇市に、二五％が旧コザ市に集中していた。表向きはバー、キャバレーなど、あるいはホテル、旅館の免許で営業を行っていたが、そこで働く女性の半数が「売春」をしていたと思われる。

「売春婦」一万人のうち四〇％～五〇％は母子家庭の母親だといわれた。生活苦のため、バーやキャバレーから前借りしてホステスとして働き、子どもの病気とかお産で仕事を休むと罰金として前借金に加算され、迎えの男がやってきて足賃としてさらに借金に加える為、借金が雪だる

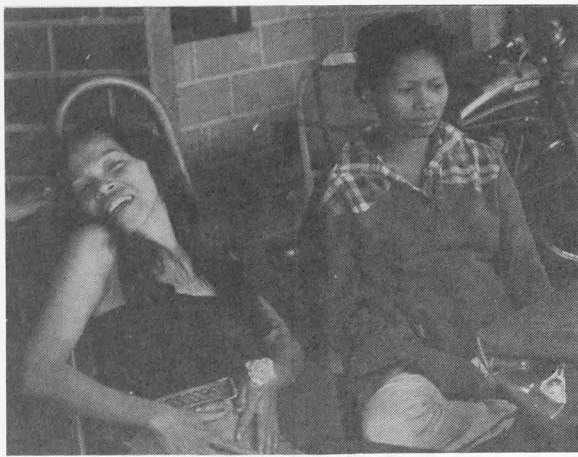


沖縄市内ディスコ

互にして夜中二時まで働いている。色々話して、彼女自身、自分が信用されているからではなく、結局は、何役もこなす、安い使い捨てロボットのみたいだという事は知っている。彼女を黙らせているのは、フィリピンと日本の間の経済格差である。今年の五月、偽装ビザで摘発されたグループは、フィリピン女性二人を一年半余り、強制売春させていて、背後に暴力団幹部が資金調達していた事が発覚している。

●女子高校生基地出入りの問題

一昨年十一月、那覇市に近いキャンプキンザー（旧牧港補給基地）に、女子高校生が出入りしている事実が表面化し、社会問題となった。老朽化した基地のフェンスが補修されないまま放置され、そこから米兵が、ディスコクラブやローラースケート場で知り合った女子中高生を基地に自由に入れていた事、ゲートからの出入りも米兵の同伴であれば、ゲストとして何の規制も受けず許可されていた事実が浮び上がった。この問題の背景を分析すると、①米兵の若年化、②円高ドル安などを含む経済的要因、③中高生をとりまく沖縄の教育、社会環境等が考えられる。新聞報道によれば「在沖米海兵隊員は約一万八千人。一番多いのが上等兵、



疲れきったオロンガボの女たち

伍長クラスで、平均年齢は二十才弱だ。十八才で入隊した彼らはまず、米本国で十三週間、新兵訓練を受ける。沖縄につくのはその後しばらくしてからで、勤務年数は通常一年。勤続二年未満で給料は月六四二ドルにすぎない。本国の家族への仕送り税金など差し引くと手元に残るのは半分余り。「懐も豊かでない若い兵士たちにとってはディスコやローラースケート場、ハンバーガー店などが恰好の時間とエネルギーの発散の場となる。

沖縄社会のひずみもこの問題を生みだした要因の一つである。失業率全国平均の三倍、母子家庭全国一、また未婚の母は全国平均五倍という高さが示す経済的、社会的不安定さ

に加え、復帰後は学校教育も受験教育中心に偏向し、様々な問題をかかえて中高校生が学校教育からドロップアウトする数が増加している。彼女たちは、疎外と無力感を抱いてディスコやローラースケート場にたむろする。そこで米兵達に出会うのである。県教育委員会でおこなった高校生を対象にしたアンケート調査によつて、回答者の九パーセントに当る二五四九人が基地に出入りした経験があり、「親しくしている外人」がいる女子高校生は二六パーセント、知り合った場所はディスコや基地周辺であることが明らかになった。

「基地」とは、戦い、暴力の支配を肯定した不自然な男性社会であり、必然的に性的支配を要求する。それ故に「基地と女性」はまさに強者と弱者の関係であるが、戦後一貫して進められた全果的復帰運動、施政権及び基本的人権の回復運動の中で、最も非人間的な人権抑圧状況下に生きる女性たちの問題は欠落したままであった。このことは家庭の主婦や女子学生に対する米兵の犯罪には抗議の集会はもたれても、もっとも頻繁に起った売春婦の死に対しては、抗議の集会は持たれなかった事からもうかがえる。そこには沖縄社会に根強く存在する性差別意識、売春婦に対する差別と偏見が根深くある。

ま式」に増えていったという悲惨な現実を当時の新聞は伝えている。

復帰後、トルコ、マージャン屋、スナックが乱立した。売防法が施行され、公然たる「管理売春」が法的に禁止されるや、売防法のおみの目をのがれたトルコ風呂が沖縄でも数多くつくられていったのだ。

本土からの観光客は二〇〇万人に達し、その六〇％～七〇％が若い層である。かつては、基地経済と、米兵を相手に売春をせざるをえなかった女性たちは、復帰後の経済の混乱のため本土からの観光客を相手に「売春」をせざるをえなくなった。七五年の「海」その望ましい未来」をテーマにした沖縄海洋博は、本土からの観光客を誘致する計画であったが、当初からオイルショックに見まわれ不況とインフレをひきおこした。

「沖縄のさびやかな本土系列化が進む中で、それまでなかったトルコ風呂業が海洋博見物を目当てに急激にふえ、東京、福岡などからトルコで働く女性たちも大量に導入され、全国主要都市並みの軒数になって（全国一〇位）本土からの観光客を中心に現在も繁栄している。海洋博は予想外の不振で、限られた客足も本土の大手資本系列に吸いあげられ、地元では、その時の負債で一家離散やトルコで働く主婦も出て、現在もな

お後遺症に苦しんでいる」（福音と世界「沖縄の売買春問題」高里鈴代）とあるように、基地にまつわる売春、観光売春と「売春」の形態も複雑化してきている。

売春防止法が施行されて十一年。「売春」の実態は複雑化するばかりで、何一つ解決されてはいない。基地機能はますます強化されるなかで、第三次産業だけが肥大化していく。観光収入もあてにはならないなかで、あい変わらず、基地経済に依存しなければならぬ現実を強いられている。

母子家庭が全国一位という深刻な問題をかかえているうえ、今、臨調のなかで「婦人保護費補助金」を全面廃止する方針がうたがわれている。一方で「売春婦」のみを取りしまり、他方では婦人保護費補助金の廃止を強行するという矛盾した政府の政策はけっして容認できるものではない。基地があるかぎりそれにまつわる「売春」はついてまわり、「売春」も後をたたないであろう。



韓国・基地の村東豆川から

トンドウチヨン

韓国の学生たちの間で、反米の気運を反映するかのよう、学生の眼でとらえた「基地売春」のレポートがある。(高麗大学Ⅱ高大新聞八一年三月)ここに、その内容を紹介する。

基地の村・東豆川が再び活気をとりもどしている。在韓米軍の撤収が、レーガン政権になってから中止されなかった。

ソウルから東北に向ってバスで一時間のところにある東豆川は、朝鮮戦争後、軍事的に重要な地点となり、米軍が駐屯するようになってから基地買春がおこなわれるようになった。日本人の「買春観光」に対しては民族的な恥だとする声が高かったが、米軍を相手に体を売っている女たちには目が向けられてこなかった。

東豆川米第二師団に勤務する兵士たちは、約五〇〇の米軍相手の店が並ぶ東豆川の保山一里と生淵四里を「マーケット」と呼んでいる。「マーケット」は午後五時から、ポップソングが流れ、米兵であふれる。

米軍兵士を相手にしているヤンセクシ(訳者注・米人相手の娼婦、外

国人の花嫁の意)と呼ばれる韓国の娘たちは、現在、ここだけで約五千名いて、この数は東豆川の人口の約十四分の一にあたる。米軍兵士が七千名程度いるので、おおまかに見積って一対一の比率を示している。ベトナム戦争が最盛期を迎えた六〇年代末には、ヤンセクシの数は七千を越したが、七六年以後いちじるしく減りはじめ八〇年冬から再び増えはじめた。東豆川は、韓国経済の流れよりも米軍部隊の事情にはるかに敏感で、米軍の撤収とか中止とか言われるごとに、「幽霊人口」の移動がある。

女たちが「基地の村」へたどりつく道は、大きく四つに分けることができる。第一に、無許可紹介業者を仲介とする場合。第二は、新聞広告を通じて、「米専用ホールウェイトレス募集、二〇万ウォン先払保証」などとして求人する場合、さらには、置屋の主人が自分のところで働いている女性たちを使って、地方から彼女たちの友人を連れてこさせたり、女たちが自分たちで選んで来る場合がある。

東豆川のヤンセクシ五千名中、約三千名が月五百ウォンの会費を出して慰安婦自治団体東豆川婦女「タンポポの会」に登録している。この「タンポポの会」は六〇年代後半から、ヤンセクシ出身の女性を中心になって運営しており、ヤンセクシの相互扶助や人権相談、軍隊慰問等の活動をおこなっている。「タンポポの会」と米軍がどんな関係にあるかは、ヤンセクシの葬儀の際、仲間の会員たちが棺おけを担ぎ、米第二師団の正門の前で一礼するということからわかる。正式にヤンセクシとなろうとするものは、まず「タンポポの会」に登録し、揚州郡の保健所に六枚の写真と健康証登録をしなければならぬ。これらの手続を終え、米軍専用クラブに出入りできる「パス」が発行される。この「パス」には一週間に一度ずつ受ける性病検査の判が押される。

この「パス」を持っていないヤンセクシのなかには、無許可紹介業者にだまされて強制的に人身売買された十代の未成年者が多くふくまれている問題になっている。揚州郡では未

成年者が米軍兵士の相手をした場合、取り締りを実施し、更生施設におくる。ここに収容された十代の女性たちの多くは低学歴であり、農村出身である。少女たちの三〇％は性病にかかれ、退所後、「基地の村」に再び戻ってくるケースもあつた。 「G・I」文化は、ダンスと音楽の流行に先導的役割を担っていると言われているが、同時に性病の伝染と大麻・LSDなどもちこんだ。 五千余名のヤンセクシの上に成り立っている町―東豆川。市への昇格も間近いこの町は、数多くのヤンセクシと七百余りの置屋そして彼女たちと米兵相手の店で形成されている。米軍兵士と一晩共にして彼女たちが受ける金額は二〇〜三〇ドルで、



同様して一カ月うけとる代価は月二〇〜三〇ドルである。それでもなお彼女たちが「基地の村」からぬけだせないのは、彼女たちに寄生している者たちがいるからだ。部屋ひとつに寝台、ステレオ、衣裳ダンス等、ヤンセクシ生活をはじめるのに必要な最少限度の家財道具を整えるために、七〇〜八〇万ウォンの金が必要だ。抱え主が最初に一括購入し

てくれるので自己資金はかからないが、その代わり月一割の利子をドルで支払わなければならない。抱え主の巧妙な罠にかかってしまうのだ。 ある韓国人兵士は、ヤンセクシを「必要悪」と規定する。他国で勤務している軍人たちの精神的肉体的欲求を満たしてくれる場所がないとすると、もともとたくさん被害が韓国女性に及ぶからだという。しかし、

なぜ彼女たちだけが犠牲にならないればならないのか。韓国政府は彼女たちに心を砕くことはおろか、今まで意識的に無視し続けて来た。 ヤンセクシたちに唯一の希望があるとすれば、それは良い米軍兵士と巡り会い結婚をして、米国に渡ることである。米軍兵士と結婚するヤンセクシの数は、年平均一五〇〇〜二〇〇〇人である。しかし、米軍兵士と

結婚して米国に移住したヤンセクシのほとんどが言葉や生活習慣、結婚観の違いなどが原因で離婚し、再び米国の歓楽街に身をおくという事実が広く知られている。 今日、 「マーケット」では、韓国の乙女たちが米軍相手に笑顔をふりまいている。(訳・緑川まさみ)

韓国の米軍基地

核弾頭の配備も

解放後三十八年、そして朝鮮戦争の休戦協定から三十年―韓国には一貫して米軍の基地がおかれ続けた。解放後、南北が分断され、南に米国の軍政がしかれたことは知られている通りだが、大韓民国政府の樹立後、韓国軍の軍事顧問団として駐留しつづけていた米軍は、朝鮮戦争に米軍が国連軍として介入したのちは、一挙にその数もふえ国内に多くの基地がおかれることになった。

米国はこの三十年間、朝鮮はなお臨戦状態にあるとして、軍隊を送りこみ、数十億ドルにおよぶ軍事援助を続けて来ましたが、現在も、韓国内

には、約四〇の軍事基地があり、四万名をこえる米軍がそこに駐留しています。基地を永久化させるため、一九八二年には一億五千五百万ドルが用いられました。

軍事境界線の非武装地帯の近くに多くの基地があることが、この三十年間、小さな衝突が起つても全面戦争にまで発展しなかった理由である。主張する人々も、韓米両国にいますが、実は、このことが緊張を高めているのだとも、いえることです。 これらの基地には、六〇以上の核兵器があるとラロック報告書が推定しており、その中には二十以上の核弾頭も含まれているとみられます。

東豆川のほかに、議政府(ウイジョンブ)、烏山(ウサン)、蔚山(ウルサン)などは基地の町として知られており、これらの基地に配備されたファントム戦闘機は、日本の横田空軍基地の指揮下にあつて、有事の際は、核を搭載して飛びたてようになっているのです。

チーム・スピリット演習にみられるように、日米韓の三者を一体とした軍事化は、レーガン政権のもとでますます強化されています。

今年のチーム・スピリット八三には、例年になく大量の核装備が投入され、マイヤー米陸軍参謀総長が「在韓米軍司令官は、核の使用を大統領に建議する権限をもつ」と発言するなど、朝鮮半島の核基地化が憂慮される中でこのような米国の軍事政策に対し、韓国内での声とともに、米国内からも憂慮の声があげられて

います。

米国防人ド奉仕団のデビッド・イースター氏は、その講演(一九八三年二月・新韓民報所収)の中で、米軍の駐留に、反対するいくつかの理由をのべていますが、その中で次のように語っています。

「第二に考慮すべきことは、海外軍隊駐屯の代価についてはほとんど述べられていないということである。アジア各地の米軍基地と同様、韓国の全ての米軍基地周辺には、広大な売春地域があり、韓国の若い女性たちがその肉体を売っている。アメリカは、韓国に四万名の軍隊を駐屯させることで、娼婦という「職業」の発展を助けているのか?」(A・Y)



太平洋戦争の最中に、女たちが従軍慰安婦として軍隊とともに戦場を転々としていたこと、特に、その中に若い朝鮮人女性が多く含まれていたという事実がよく知られている。しかし、その知られ方は日本とアジアにおいては異なるようだ。日本では何冊かの例外を除いてその事実は戦争を体験した男たちの口伝とか、戦記物などを通してある種のなつかしさをこめて語られ、アジアにおいては、歴史の概説書や教科書にまでとりあげられて、日本の侵略戦争の非人間性を示す如実な例として語られていくからである。ただ、その事実について歴史的に調べた資料はなかなか見当たらない。

第一に、どれだけの数の女たちが、慰安婦として戦場にひっぱり出されたのか、その人数すら明らかではない。朝鮮人慰安婦についていえば、一九四六年八月一日付ソウル新聞に「一九四三〜四五年の二年間に、二〇万名が女子挺身隊に動員されたのうち五万〜七万が慰安婦とされた」と推定される」とあるのだが、その推定の根拠は明らかでない。(朝鮮人被爆者の数も、戦後三十数年はつきりしないままであり、現在なお再調査が続けられていることを考え合わせると、慰安婦とされた女性の数の推定もおおむね今後に残された仕事であろう)

数の推定すらできないことの理由はいろいろ考えられる。まず、日本側についていえば軍隊が売春婦をつれていったといううなことを政府が公式の記録に残すはずはないし、徴用とはいっても、彼女たちが連れ去られた経緯は実にさまざまであるために、資料を探ることが難しいからである。

日中戦争が始まると一九三八年五月「国家総動員法」が発令され、翌三九年には「国民徴用令」が出され、「労務動員計画」のもとに、次第に朝鮮人労働者の内地軍需産業への「供出」が強化された。また一九四四年には女子挺身隊がつくられ、いろいろな工場へ女たちが動員されたが、慰安婦の場合は、実際には軍隊の御用商人(売春業者)が私的に集めたという形になっているのがほとんどであり、軍属の身分をもつものもなかったと思われる。「軍馬」や「軍犬」などとともに彼女たちは「物資」としてとり扱われたのである。

朝鮮人慰安婦のこと 数も名も知れぬままに

だが、朝鮮人慰安婦の連行は、軍の方針としてすすめられ、末端においては、募集というよりも、国家の権力を背景とした「人狩り」が行なわれたのである。一九三八年一月、上海で慰安婦の検診に当たった軍医(麻生徹男)の上申書は「皇軍兵士のために」若く健康な朝鮮女性の導入をすすめており、また、強制連行の実態については、近年その当事者であった人の証言が明らかにされるようになった。一九八二年十一月、サハリン在住韓国人帰還請求訴訟の裁判で、吉田清治証人は一九四三年五月、済州島(チェジュド)において女子挺身隊二百人を募集した経験を証言しているが、軍隊が銃剣をもってとりかき、トラックに放りこんで連行し、暴行し、船にのせたというさまじいものである。

このようにして連れ去られた多くのものは戦場に置きざりにされた。必うじて生きのこった人々も、自分たちの経験を語ることもなく、日本やソウル、釜山などの片すみにくらしている彼女たちが口をとぎしているためにおこる問題として、在韓被爆者の救援に当たっていたある韓



一九三八年 北支・黄河沿岸にて

山口 明子

従軍慰安婦のことを知ったのはいつのことだろう。一九六五年の夏、毎日新聞社で、戦後二十年を記念して「日本の戦歴」——秘められた二十年の戦場——という写真集が出版された。一九三一年九月十八日の柳条溝事件——いわゆる「満州事変」とよばれている——日本の侵略戦争の始まりから一九四五年の敗戦まで、毎日新聞の特派員の撮影によるネガから、当時検閲当局によって報道「不許可」になったものから並び出して出版されたものである。それらの写真の中で、眼に焼きついていつまでも離れない一枚の写真があった。

眼鏡をかけ、黒っぽいスーツを着た女性が、片手でスカートの裾を持ちあげ、片手で頭の上に乘せたトランクをささえている。もう一人の女性は白い歯をみせて、傘をこわきにかかえ、やはり同じようにスカートをたくしあげて河を渡っている姿だった。写真説明によれば、一九三八年六月「慰安婦」とよばれる一群である。朝鮮婦人のおおかつた。彼女らはつねに進撃する部隊を追い(筆者点線)第一線にむかっていたのだ……とな

っていた。その写真をみた当時は慰安婦という言葉の意味が正確には理解できなかった。厚い写真集の中には、他にも数枚「日本女性」の着物——芸者姿の写真もある。「戦火がおきると、日本内地から脂粉のおおきマキをマキちらす女性がおしよってきた。兵隊をなぐさめるための女性であった……(略……)当時としては外聞をはばかる写真であった」と写真説明がついている。いずれも女性たちが自ら志願して出稼ぎにおしよせたかのような表現である。

日本軍が「女子挺身隊」として朝鮮女性をだまし、徴用してつれ歩いたとも、売りとばされて、はるばる中国の戦場に連れてこられたことなどかけられも感ぜせない。

一九七三年、キーセン観光に反対する韓国の女性たちの怒りの声に呼応して始まった日本の女たちの活動の中で、札束を持って韓国に女性を買いに行く男たちの姿と、従軍慰安婦をひきつれて戦場を駆けめぐった男たちの姿が「侵略」ということばで結びついたのは偶然ではなかった。と、同時に、当時出版されたばかりの千田夏光氏の「従

従軍慰安婦と買春観光

軍慰安婦」(双葉社)を読んだ時のショックは忘れられない。正直に云うと、途中で気分が悪くなつて何度か本を投げ出したくなった。皇軍の兵士をよりよく動かせる——より多くの「敵」を殺させる——ための国策であったのだ。

一方、当時の日本国内では戦時色一色にぬりつぶされていく中で、銃後を守る女たちに「貞淑髪」なるヘアスタイルが流行したり、徴兵された留守家族の妻たちは厳しく「貞操」を守ることが強制される。娼家先は云うに及ばず、隣り組組織、婦人会などの厳しい監視の中で女性の性は強く抑圧される。戦場に行つた「皇軍の兵士」である夫たちのそばに、大日本帝国が徴用した「慰安婦」として仕立てあげられた女性たちがいることを、留守家族の誰が想像したのだろうか。

戦場での女の写真が「不許可」の印を押されたことはもつともなことだったのだ。

敗戦後の混乱の中で、戦場から命からがら帰ってきた男たちが、戦場の中にこそ「真実の愛」があったということ、その女性たちにいかに慰められ、自分た

ちだけは、階級を越えて「平等に愛し合ったのだ」と書いている本が多々ある。そこには何故そのような女性がそこに存在したのか女性の背景については殆んど記されていない。(「悲しき戦記」はるかな戦場」伊藤桂一著など)

殺すか、殺されるかの境目の中で、何のための戦争かを問うこともなく、文字通り「慰安婦」の中に真実の愛があったと云つてはばからない男たちの発想に、百歩ゆずったとしても金銭で売買される性の真実とは何だったのか。キーセン観光をはじめとして、台湾に、フィリピンに、タイにと、どこまでも知らず買春観光に押しかける男たち、日本の女がとつて失くしてしまつた女らしさがある「やさしくしてくれろ」と悦に入っている男たちと、従軍慰安婦をつれ歩き、侵略した村々で強姦のかぎりをつくした男たちと、どこがどうちがうのだろう。

現在、日本の性侵略、経済侵略に怒りを持って告発するアジアの国の人びとに問われていることは、まさに、私たち日本人の男と女の関係、国と国の関係なのだ。

五島 昌子

輸入される女性たち

国内版「買春ツアー」

塚本 由美

アジア蔑視と女性差別

「女をいくらで買って、いくらで売った」——アジア各地から日本の歓楽街へと「輸入」される女性たちを訪ねて関係者の間を歩いた時、そんな言葉があらさまに連発された。台湾やフィリピンの女は人間ではない、とでもいうのだろうか。何万人ものアジア女性たちが、契約とは名ばかりのルートで連れて来られ、性産業界の中でもっともぞんざいなあつかいを受けていた。アジア地区への買春ツアーは急減した」と宣伝される裏で、形を変えたもう一つの「南北問題」としての買春観光が、私たちにとってより身近な場所、とどまるところを知らぬエスカレーターを続けている。

輸入される女性たちは、台湾を皮切りにアセアン諸国が渡航自由化に踏み切り出すにつれて、七九年ごろから急カーブで上昇する。観光ビザや興業ビザを手に入国して、ホステス（五八%）、ストリップパー（二三%）などの「資格外活動」に従事するわけだが、短いビザの期限はすぐ切れしてしまう。「不法残留」による強制送

還件数もうなぎのぼりだ。

資格外活動による引渡件数は、七八年までは二百人台で推移してきたが、七九年に一挙に六百六十七人にハネ上がり、以後は七百四十二人、九百七十三人と、三年間で三・五倍。不法残留も、七九年の八百一人から、八一年には一千二百人と増えた。台湾、フィリピン、タイの三国が七一八割を占め、資格外活動による引渡件数の九三%が女性だ。

出稼ぎ女性たちの実数はつかみづらいが、警視庁によれば、八〇年にはフィリピンから興業ビザで八千五百人、観光ビザで九千人の女性たちが来日した。全国のコリア・クラブには、七千一万人の出稼ぎキーセンがちらばっているともいう。この他に、台湾、タイなどが加わると、数万人規模のアジア女性が、滞在中になるのだろうか。

「目の前で、タイの若い娘さんがどんだんセリ落とされて行く。見ていられなかった。同業の男性記者がその光景を話す。昨年末ごろから上野、昭和通りの一角に軒を並べる数軒のビジネスホテルが、人身売買の舞台になっているのを聞き込み、あら

ゆるコネをたぐりよせて潜入したというのだ。奈良や大阪など関西から業者がきていた。最高額で、六カ月拘束七十五万円。チビクロサンボなど侮蔑されて、二十万円で買いたかれた少女もいた」

タイの輸入ルートはこれまで、日本側がスカウトに出かけるか、女性たちが先輩格を頼って来日するかだったのだが、最近では、タイのエージェントが女性を連れてきてセリに出す新種まで登場した。

輸出入ルートを裏から「演出」しているのは、広域暴力団である。成田署によると、八一年一月十日までに、五百三十五人の暴力団関係者が女性や密輸品の買いつけのため、成田空港から出国して行った。

ジャパニーズ・ヤクザにだれ込まれたフィリピンでは、「プレティン・ツデー」などの新聞が、「ヤクザの暗躍で日本警察がマニラに出張」「じやばきさんの親たちから苦情が殺到」などと、実情を伝えている。「サラー未払いの渋谷区神宮前のゼロプロモーション」「マニラの夜の三大帝王——トシヒロ・ナカジマ、タカシ・アオヤマ、コバヤシ」など、実名をあげて告発する記事も出ている。が、相手国の怒りの声など想像もつかないのか、後日、タイ女性六人を百二十万円でせり落とした西日暮里

のマントル「A」の関係者に会いに行くと、警戒するどころか、自慢話に花を咲かせるありさまだった。「一カ月で千二百万円も上げさせてもらったよ」

ボロもうける業者とは裏腹に、彼女たちの見返りはあまりにも薄い。法務省の「報酬受領額」によれば、未受領者が二八・六%にも達し、五万円未満一〇%、五万十万円一一・二%、十一二十万円二〇%、二十三十万円一〇・八%など、全体の八〇・六%が三十万円未満の収入だった。

まさに「暴力」としかいいようのない蛮行である。同じことが、日本人や欧米人を相手にできるだろうか。何万人ものアジア女性を輸入し、もっとも安手の性商品として平然と売買する背景には、相手が「アジア諸国だから、女だから」とみくびる二重の差別意識がある。

利用する母国

何万人もの出稼ぎ女性を送り出すアジア諸国は、加速度的に増え続ける対外債務に苦しむ国でもある。

韓国の対外債務残高は現在、ブラジル、メキシコ、アルゼンチンに次いで、三百六十億ドル（九兆円）。年間の元利金返済だけで六十億ドル（二兆五千万円）にもなる。一月には、

「ついにデフォルト（債務不履行）に突入」と報じられた。

一方、フィリピンの対外債務は、韓国、インドネシアに次いで、百七十億ドル。同じく、タイ百億ドル。さらに、世界不況の長期化が打撃となつて、国内では職が見つからないフィリピンでは、六十万人もの男女が海外約六十カ国に出稼ぎに出ており、タイの国家予算は二年連続で対前年比伸び率一ケタ台の緊縮型にとどまった。

こうした経済的逼迫が、出稼ぎ売春をますますエスカレートさせて行く。

韓国のキーセンたちは、政府が発行する「芸能人ライセンス」を手に入れた。政府は彼女たちに即席の歌や踊りを二・三週間仕込んだ後、試験を行って、ライセンスを発行する。

が、入国後は「コリアン・クラブ」から支給される月収は、契約によって、韓国ウォンで故郷の親元や家族に送金されることになってるんです」と、在日韓国人記者は説明する。「彼女たちの手元に入ってくる現金といえは、プロダクションが支給する食費（一日千五百〜二千円）だけ。しかし、ほとんどの女性が来日用の準備金をプロダクションから前借りしている。食費で借金は返せません

からね。売春する以外になくなるんです」

全国にちらばるキーセンが七千一万人。コリアン・クラブの月収が二十万円前後。これに売春による収入が加われば、本国にもたらされる外貨は、たいへんな額になる。

「政府が娼婦を公募して、ライセンスまで与えている。外貨稼ぎの管理売春にしか見えない」と彼は結んだ。一方、フィリピンは今年初めから、海外労働者の本国送金を半ば強制的に義務づけた。海外労働者は、銀行ルートで月給の一定額（船員および建設労働者は七〇%、その他職種五〇%）を送金しない限り、パスポートの更新は認めない、という厳しい内容だ。

しかし、外貨を持ち帰らねばならない側の事情は、あまりにも深刻である。

早春の午後、タイ南部のプケットから来日したばかりという二十三歳の女性を南千住のアパートに訪ねて行くと、気候の急変のためか、八度五分もの熱を出して、コタツでふるえていた。職業は農家の主婦で、日本は初めて。風俗営業にタッチしたことはタイ国内でもない。養豚経営に失敗したんです。家で、夫と両親、一歳から五歳まで四人の子が待っている。お金を送らなければ、でも、

日本の経済侵略

アジア諸国が外貨稼ぎの売春に力を入れなければならぬ最大の理由の一つが、日本の経済侵略にある。

韓国商工部の統計によれば、六五年の日韓国交正常化から昨年末までの十七年間に、韓国の対日貿易赤字は二百三十九億六千万ドルに達した。これは、八二年の韓国輸出総額の二百十六億ドルを大きく上回っている。日本は過去十六年間に四十億ドルの対韓借款を行ったが、いびつな経済関係によって、韓国側は借りた金の六倍もの貿易赤字を抱き込まれた勘定になる。

韓国内では、七九年から三年間続いた低成長のために国内インフレは一時期三〇%にも達し、昨年三・八%だった失業率は、今年になって四・五%。全体の五九%にあたる八百七十万労働者が月収三万円以下の生活苦にあえいでいる。

こうした日韓経済の是正をめぐって、さる五月に日韓貿易会議が三年ぶりて東京で開かれた。「韓国日報」

によれば、懸案の日韓貿易不均衡の是正を求める韓国側に対して、日本サイドは逆に駐韓日本商社に対する地位や待遇の改善問題を持ち出すなどして、逆襲に出るありさまだった。

日本とのいびつな経済関係などから、アジア諸国の対外収入には片寄りが生じている。八〇年、韓国では海外出稼ぎ労働者からの送金と観光収入が輸出総額二百億ドルに対して五十八億ドルにもなった。フィリピンでは、海外出稼ぎ労働者からの本国送金が八二年には七億ドル。これは同年末の外貨準備高の三〇％に当たる。タイでは、買春観光と表裏一体の観光収入が、八〇年にはコメに次いで外貨獲得の第二位にのし上がった。

アジア諸国と日本国経済とのかわり合いを見る時、相手から一方的に富をまき上げ、その利潤で、独裁政権の「国策売春」に便乗して、もっとも安い性商品としてのアジア女性たちを大量に輸入している構図が浮き彫りになってくる。性侵略と経済侵略が表裏の関係で、出稼ぎ売春問題をエスカレートさせているのだ。

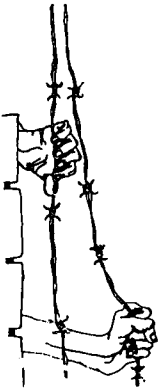
日本—バンコク間を十年近く往復している二十九歳のタイ女性性は、食べるために、いまだに日本国内を流れている。彼女がいう、「日本の男は

私たちに若さだけ求める。二十五歳過ぎたら、東京に仕事はない。地方都市もダメ。今、横田基地で働きたが、時々吉原のトルコでアルバイトしてる。お客さんがつかなくなったら沖縄へ行くよ。沖縄には仲間がいるし、入管もイージーだから……」

東京から地方都市、在日米軍基地そして沖縄へ……。終着駅の沖縄・金武湾ではホステスの半分以上がフィリピン人になってしまったという。

その異境を流れて行く姿は、明治から大正にかけて、東南アを中心に、オーストラリア、インド、アフリカのザンジバルにまで足跡を印したからゆきさんの上に重なって行く。時代と国境を越えて、女たちの貧しさを利用し尽くすのは誰なのか。

※注 八〇年資格外活動者の稼働内容



東京都内及び近郊で働くフィリピンからのエンターティナーたち（出稼ぎ芸能人）延べ十四、五人との交わりを通して私が垣間見た彼女たちの生活を報告する。

まず、これらエンターティナーたちは、店の主人（マスター）が所有あるいは借りている家、又はマンションなどに居を構える。ふつう人目にたない所が選ばれている。例えば国道に沿って走るもう一本の裏通りの一角とか、隣りは駐車場、島とか、一階、二階がうらぶれた飲食店、麻雀屋などで、その上の、裏手の狭い階段を上りつめた所といった具合である。このような住み家が多い時には十名近い女性が六畳一間のDKにひしめく。もちろん夜具も充分にない。家具といえは日本の歌を習うためのテレビ一台、台所に小さな冷蔵庫、テーブル、店で使い古した椅子数個位で、洋服は全部窓のカーテンレールにかけてある。

ここでの生活は店が終って帰宅する午前六時半から始まる。始まるというよりも、朝食をし、すぐ就寝するわけである。午後二時頃起床し、昼

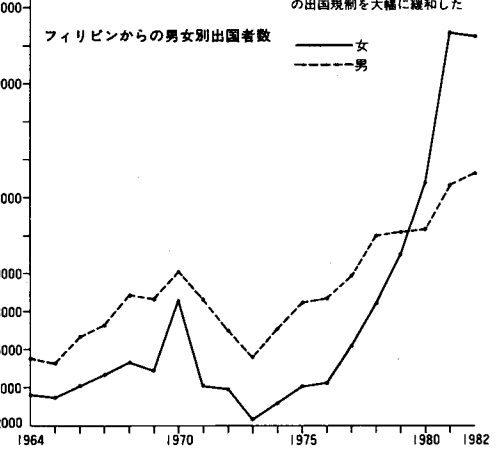
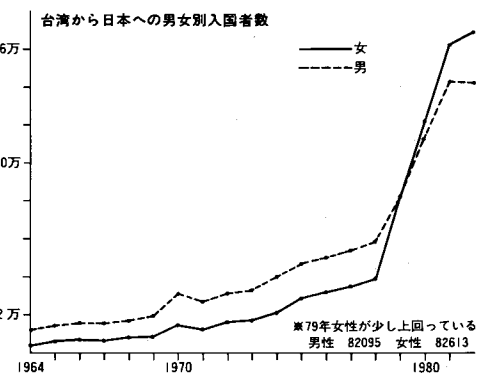
伊 従 直 子

食兼夕食をし、洗濯、風呂、出勤準備などで時間がなくなってしまう。食事のためには一日千円が支給されるが、彼女たちは一週間を二千円に切りつめてやりくりする。給料は店が変わる時、または帰国直前に手渡されるのでこうして貯めた中から衣裳などを買わなければならない。チップなどで余分の金が入ると国に待つ家族、親族のためのおみやげが、カメラ、時計、ラジカセから始まり、ありとあらゆる物が買い揃えられていく。

あるエンターティナーは以前地方の都市にあるバーで働いていたが、マスターの家に住み込みで、食費は支給されず一日一食が与えられるだけだった。多分店で高くつくものを客に食べさせて貰うか、売春をして何がしかの余分の金をとる仕組になっていたであろう。

やがて夕方六時半ともなると、マスターがライトバンで迎えに来る。外からは中が、中からは外が見えぬように、窓にはカーテンがひかれています。店は八時に開店だが、一時間前に着き、歌の練習や、その他の準備をさせられるようになっていく。

気の停滞と共に頭うちになってくる。日本人出国者数を男女別にみると、観光買春問題地の台湾、韓国、フィリピンへは80～90%、タイへは75%を男性が独占する。80年代に入るとそれらの国を訪れる日本人男性の数は年々減少していく。一方それらの国からの日本への女性の入国者は増大し続ける。特に近年増加の激しい台湾とフィリピンの男女別入国者数を18年間追ってみると、長い間男性が他の諸国同様上回っていたのがつい最近、79・80年に逆転したのがみてとれる。フィリピンの場合、その逆転が非常にはっきりしている。（まとめ・杉山みちこ）



資料

日本人海外出国者数は、60年代後半徐々に増していたが、70年代になると日本への外国人入国者数に追いつき、それを上回るようになる。70年は日本ヘリコプター・ジェット機が導入された年で、これより航空機による大量輸送時代、パック旅行全盛の時代となる。しかし異常な程の海外渡航者の増大も80年ごろから景

日本人出国者数

	1965	1970	1975	1980	1981	1982
総数	162,910	663,467	2,466,326	3,909,333	4,006,388	4,086,138
男	162,910	663,467	2,466,326	3,909,333	4,006,388	4,086,138
女	162,910	663,467	2,466,326	3,909,333	4,006,388	4,086,138
アジア						
男						
女						
台湾	13,936	113,676	358,621	584,641	568,290	558,154
男	13,936	113,676	358,621	584,641	568,290	558,154
女	13,936	113,676	358,621	584,641	568,290	558,154
韓国	5,212	45,269	319,984	428,008	422,502	414,322
男	5,212	45,269	319,984	428,008	422,502	414,322
女	5,212	45,269	319,984	428,008	422,502	414,322
香港	26,554	92,071	311,364	359,692	342,078	329,427
男	26,554	92,071	311,364	359,692	342,078	329,427
女	26,554	92,071	311,364	359,692	342,078	329,427
シンガポール		6,386	35,860	124,689	166,828	189,253
男		6,386	35,860	124,689	166,828	189,253
女		6,386	35,860	124,689	166,828	189,253
フィリピン	3,292	7,204	119,876	187,445	161,453	142,353
男	3,292	7,204	119,876	187,445	161,453	142,353
女	3,292	7,204	119,876	187,445	161,453	142,353
タイ	5,116	12,946	69,890	93,413	89,759	97,837
男	5,116	12,946	69,890	93,413	89,759	97,837
女	5,116	12,946	69,890	93,413	89,759	97,837
インドネシア	2,345	5,790	25,278	62,098	69,152	74,738
男	2,345	5,790	25,278	62,098	69,152	74,738
女	2,345	5,790	25,278	62,098	69,152	74,738
マレーシア	4,864	2,433	7,916	18,893	22,111	24,669
男	4,864	2,433	7,916	18,893	22,111	24,669
女	4,864	2,433	7,916	18,893	22,111	24,669

日本への外国人入国者数

	1965	1970	1975	1980	1981	1982
総数	291,309	775,061	780,298	1,295,866	1,552,296	1,708,306
男	291,309	775,061	780,298	1,295,866	1,552,296	1,708,306
女	291,309	775,061	780,298	1,295,866	1,552,296	1,708,306
アジア						
男						
女						
台湾	15,583	46,535	77,091	235,549	305,233	311,125
男	15,583	46,535	77,091	235,549	305,233	311,125
女	15,583	46,535	77,091	235,549	305,233	311,125
韓国	17,068	48,027	91,745	139,244	160,193	183,831
男	17,068	48,027	91,745	139,244	160,193	183,831
女	17,068	48,027	91,745	139,244	160,193	183,831
香港	4,326	12,506	19,318	32,239	46,614	59,898
男	4,326	12,506	19,318	32,239	46,614	59,898
女	4,326	12,506	19,318	32,239	46,614	59,898
シンガポール		5,663	9,582	18,346	25,398	31,754
男		5,663	9,582	18,346	25,398	31,754
女		5,663	9,582	18,346	25,398	31,754
フィリピン	8,945	20,477	12,574	27,902	37,483	37,878
男	8,945	20,477	12,574	27,902	37,483	37,878
女	8,945	20,477	12,574	27,902	37,483	37,878
タイ	3,399	10,010	11,795	17,884	23,768	31,422
男	3,399	10,010	11,795	17,884	23,768	31,422
女	3,399	10,010	11,795	17,884	23,768	31,422
インドネシア	4,656	8,692	11,377	17,854	24,368	27,452
男	4,656	8,692	11,377	17,854	24,368	27,452
女	4,656	8,692	11,377	17,854	24,368	27,452
マレーシア	3,117	6,939	8,977	14,688	20,896	24,120
男	3,117	6,939	8,977	14,688	20,896	24,120
女	3,117	6,939	8,977	14,688	20,896	24,120

この会議の背景

一九八〇年七月、国連婦人の十年の中間会議であるコペンハーゲン会議に、アメリカのキャサリン・バーリーさんは、彼女が前年に書き上げた「女性の性的搾取状況」と題する本をたずさえて出席した。彼女は、インタナショナル・ウイメンズ・トリビュンセンターやIISIS（共にメキシコ会議後にスタートした女性問題の情報センター）共催の分科会で、女性の性的搾取、或いは奴隷的状况が、人身売買、強制売春も含めて様々な形で存在し、決して過去の問題ではなく、今日の世界の経済的、政治的状況に関わりなく地球のどの地域にも一様に存在し、また如何に根深く、各地の伝統的習慣や制度と結びついて生きつづけているかを訴えた。そして更に彼女は、国際観光など、国際間の行き来が自由になる一方で、女性や子供の人身売買、強制売春も国際的組織が広域にネットワークをはり、特に第三世界の女性や子供たちにとって深刻な事態を招いている事を、国連やその他の国際的民間機関の調査資料、彼女自身が各国をまわって調査した結果を分科会で報告した。

コペンハーゲン会議では、アジアの女たちの会も独自で「買春観光」

についての分科会を主催したし、共通の課題に取り組んで来た。この分科会に参加した多くの女性たちの要望として、女性の性的搾取をなくす為の国際間の協力体制、ネットワークを作ろう、との声が上がった。K・バーリーさん自身、国連や国際機関などの調査や取り組みが消極的であることを実感していた事や、国連の委員会が取り組みを消極的にならざるを得ない背景に、国連加盟の国々への実態調査は、特に人身売買、強制売春などは、国の恥部をさらす問題として捉え、実態の公表を避ける、あえて調査を進めると、それを内政干渉としてしりぞけられて来たという経緯も了解していた。

やはり、この問題は女性自身が取り組み、政治的課題として行動する以外に、具体的な解決の道はない、とK・バーリー及び分科会に参加した者たちが一様に実感し、その具体的ネットワーク作りの作業（会議）を実現するためにニューヨークのインタナショナル・ウイメンズ・トリビュンセンターを拠点にして、二年半にわたり会議開催を準備した。

女性の性的搾取を無くそう!!

ロッテルダム会議報告

ロッテルダム会議風景
第三世界の女性たちが集ってネットワークについて協議、奥がヨーロッパの女性たち



会議期間は四月六日～十五日（一日間）オランダ・ロッテルダム市、エラスムス国立医科大学にて開催された。二四カ国より三〇名の女性が具体的に取り組んでいる問題を提起しつつ、女性の性的搾取状況の全体像を捉える作業を会期の前半に、又、今後具体的な政治的アクションを起こしうる為の地域別、地域間、そして世界的なネットワークを如何に具体化するかに会期の後半がかけられた。

参加者の顔ぶれとその運動

参加した二四ヶ国は、中南米地域、アジア・太平洋地域、中近東、北アフリカ地域、アフリカ地域、ヨーロッパと北アメリカ地域であった。それで、集まった三〇名の女性も、セネガルを中心にミューティレイション（女性性器の切除手術）の問題と闘いアフリカ全域のネットワークに組み込むマワ・ティアム。インドのデバタシ制度（ヒンズー寺院に娘を捧げたり、未亡人が聖なる売春婦になる）廃止に取り組むグループの代表ジョナ・チャダジさん。スウェ

ーデン政府機関で長年売春問題、中絶法制定に中心的に関わったハンナ・オルソンさん。ペルーのリマ市で極端に貧しい子持の売春婦たちの悩みを聞く毎日、しかし一方で反ミス・ユニバースコンテストなどあらゆる性差別に激しい怒りを時にはユーモラスなキャンペーン法を用いて運動を展開する私服のシスター・ローザ・ドミンゴ。レバノンからは、兵士たちの強姦で心身の被害を受けた女性たちのホームで働くシスター・コレット。又、コロンビアのオルガ・ルシア・トローロさんは三〇代初めの若さで、レイプセンター、避妊教育・売春問題など積極的にフェミニストの視点で取り組む民間組織の代表者。スリランカからは、多国籍企業のフリー・トレードゾーンで働く女子労働者への性的搾取状況と闘う弁護士のリナルカ・フェルナンデスさん。買春問題、基地売春も含め「女性搾取に反対する第三世界運動」を展開するフィリピン人のシスター・ソールは、一九八〇年以来、「女たちの会」と買春観光反対のネットワークを共につくり上げて来たフィリピンの女性たちの一人である。タイとオランダは連携を取って、オランダからの買春ツアーをストップさせた実績があるが、それぞれのグループから、オランダのリン・ラップさん（シ

ンガポール女性）とタイのシラボン・スクラバネッリさん。それに、一九七七年から世界のフェミニストの動き、その政治的活動、又、女性政治犯の救出など中広く運動と情報センターの働きをして来たIISISからはモニカさん。等々、三〇名の女性の紹介をするだけで女性の性的搾取状況がどの様な形をとって世界中に存在しているかが充分に見通せる程、多様な動き、運動の中から集まった女性たち。

全期間出席者の他に、証言者、研究者として参加したのは、チリの暴動以後、アメリカに住み、現在、軍事独裁政権下の女性政治犯に対する性的拷問を調査しているフェミニスト社会学者、国連の人身売買調査委員会より一人、イギリスの反奴隷協会より一人、また、WCC（世界教会協議会）から任命され、ヨーロッパにおけるアジア女性の人身売買の実態調査をすすめているタイ女性、それに、自分自身売春婦としての五年の生活歴を持ち、今は売春婦の権利擁護組織コヨーテの代表等であった。

性的搾取の全体像を捉える

このワークショップの最も大きな特徴は、女性に対する性的搾取を全体として捉える、即ち女性が自分の

意志、判断、力によって逃れる事が出来ない全ての状況は性的搾取状況であり、それは女性への人権侵害である。それは今日まで歴史的に男性支配社会である事から、様々な性的搾取の形が生み出されている。それ故に、人身売買、強制売春、夫の暴力、強姦、近親相姦、ポルノグラフィ、買春観光、若年強制結婚制度、政治犯に対する性的拷問、さらに、性器の切除手術、等々からのがれた女性性は全て政治的難民としての地位にあるという認識に立つと云うことである。今日の男性支配社会から生み出されるこれらの状況への闘いは政治的な行為であるなら、今後は地域毎のネットワーク、更に、先進国と第三世界が各々の状況を性的搾取の基本的認識に立って取り組むつつ相互に支援し合うネットワークを世界的規模で実現する為に努力し合おうと決意した。

このワークショップの基本線は、

売春婦に対する法的制裁に反対し、女性の体を商品とする「ひも」人身売買組織、ポルノ産業に対して厳しい法的処置を求める、更に、貧しさ故の第三世界の女性の売春と、「自由意志」売春とを切り離さない。いや、如何に本人の自由意志による売春と見なされようと、アメリカやヨーロッパ等では少女期の強姦や近親相姦が売春への道を作り、また、男女の賃金格差や労働環境における性差別の現実から、根底にある男性支配社会そのものに、女性の性が分断され、手段化されている状況においては、「自由意志」というのは基本的にはあり得ない、という視点に立つ。その意味では、売春婦の権利擁護組織グループが、「ひも」も職業としての売春婦のマネジャー的存在であり、売春婦の夫、或いは愛人でもあり、彼らに対する法的処置をゆるめ、或いは無くせ、とする立場とは明らかに

一線を画す事になる。

売春は、男性支配社会において、女性が様々な社会的状況で生き残る為の一つの手段であって、それ故に、売春は、人が人間存在として他と関わる手段の一つである対等な性関係とは全く無縁のもの、買春は単なる生きた女性の体へのマスターベーションでしかない。この概念は、買春観光、其地買春、国内のトルコ風呂買春を現わすのに明確な概念である。

又、どの様な政治的イデオロギイに立とうと、女性への性的拷問は共通の手段・方法が取られている事が数多く報告されており、これらは、他の性的搾取状況、性を暴力的に支配する、慣習や制度によって従属させることと全く同一である。

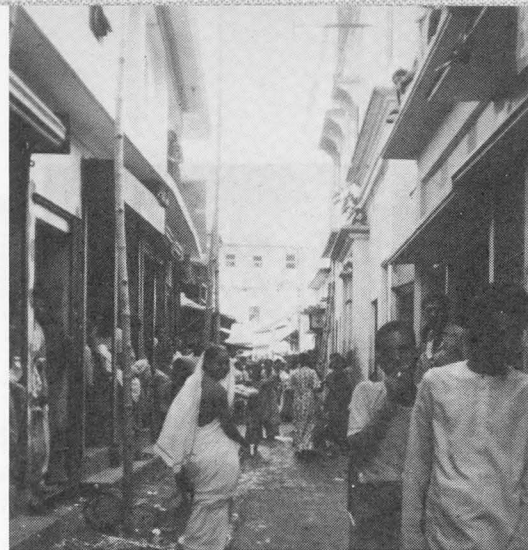
今回の会議は、先進国と第三世界ともに、その政治的、経済的、文化的、社会的状況の違いの認識以上に、性的搾取状況に対する共通の認識が上まわって、緊迫した議論も時にはあったが、むしろ、今後のネットワークの必要を完成した会議であった。フェミニズム運動の最も中核に触れていた事が、そして、一〇日間、小さなホテルで寝起きを共に、お互いの個性に触れ合える時間的余裕もあった事が、それを可能にしたかも知れない。

（高里鈴代）

衝撃の苦界

—バングラデシュ・ナラヤンガンジーを訪ねて—

シンガポールより 松井 やより



売春街は細い路地の両側に大小の娼家が軒を並べる

貧しいとは具体的にどういうことなのか、バングラデシュを二回旅して痛いほどわかった。村々を回ればおなかをふくれあがった栄養失調の子らをいたるところで見かけ、首都ダッカや第二の都市チッタゴンのスラムを通りかかると、貧血で血の気の失せた顔をした母親たちが薄汚れたサリーを着てたずんでいる。フェリーに乗れば、船着場でボロボロのルンギ(腰巻き)の老人や赤ん坊を抱いた女性が物乞いしている。そうした貧しい人々の姿が今もはっきりと目に焼きついて離れないが、何より私の心を重くしたのは港町ナラヤンガンジーの売春地帯の光景であった。ここに足を踏み入れたとたん「苦界」という言葉が生々しく浮かんだのである。

貧困と売春

アジアのどこの国を訪れても、必ず売春地帯を訪ねることになってきた。売春こそ、その国の女性たちの状況、そののみならず、その国の社会のあり方や価値観を最も鋭い形で知る手がかりになるからだ。バングラデシュでは、ナラヤンガンジーが、日本でいえば吉原に当たる伝統的な遊廓と聞いた。インド亜大陸では最も古い売春地帯というのだ。

女一人でそういうところに入出入りするわけにもいかないの、エスコ

ートしてくる男性を見つけないければならない。まず、ダッカ在住の日本人男性に当たってみた。ナラヤンガンジーのことはみな知っていて、面白おかしく話してはくれても、同行は色々な理由をつけてことわられた。「あんな恐ろしいところにはいかない方がいい」「ぼくは行ったことがないので不案内だから」などと。

やむなく、バングラデシュ人新聞記者に協力を求めたが「私があいうところに行ったことをだれかに見られたらまずい。誤解されると困るから」と尻込みするのだった。彼は、ダッカと周辺の売春地帯のことを記事にまとめたこともあり、あらま話を話してくれた。

男性の階級や経済力に応じて、場所は分れていて、金持が入りするファースト・クラスはダッカ市内のガンガジョリ地区。コルガルタイプの美人もいて、五千タカ(五万円)というとび切りの値段をとられることもあるという。中級がクマルトウリ地区。その次がダッカから二〇キロぐらい離れたナラヤンガンジーのタンパジャール地区。最下級がダッカ市内のヤドウピトウ地区で、ここは最貧困層の男性相手、数タカ(数十円)で女性が買えるという。結局、ナラヤンガンジー出身のカメラマンが同行してくれることになる

った。背の高い精かな感じの三十代の男性で、心強いガイドだ。このカメラマンと、ヘルプ・バングラデシュコミュニティの日本人ボランティア学生と三人で出かけた。昨年(82年)九月下旬のことである。

一時間足らずのドライブでナラヤンガンジーに着いた。英国の植民地になるまで、モスリン産地として栄えた古い港町で、現在の人口は四十万。さびれたとはいえ、店が並び、食べ物屋がにぎわって人間がとにかく多い。まず警察へ寄った。「面倒があるといけないから一応届けておいた方がいい。アジア女性福祉協会のメンバーとでも名乗って下さい」とカメラマンはいった。彼がこの町の人なので私たちの素性を怪しまれることもなかった。

客を呼びこむ子どもたち

人の波をかき分けながら車はタンバジャールの遊廓近くまで行った。道が急に狭くなって車を降りると、たちまち人垣に囲まれる。目の前に門のようなものが見え、目つきの鋭い男が私たちをけわしい表情で見つめる。カメラマンが早口のベンガル語でその男とかけ合っている。どう話をつけたのか、門を開いてくれた。道幅一m余りの細い路地が一本通っていて、その両側に小さきまざ

とりどりのサリーを着た厚化粧の女性たちがたむろしている。人相からいかにもボン引き風の男性やまだ昼下りというのに遊びに来た男性もウロウロしている。見上げると、各階のベランダから女性たちが身を乗り出して、私たち一行を見つめていた。

売られて来た少女

中庭にたたずんでいた娼婦たちの中に、水色の薄いサリーのあどけない美少女がいた。ほっそりして胸も平らなこの少女は、お白粉を塗りたくり、真赤な口紅をつけて、動くたびに銀色の耳飾りと腕輪が軽い音を立てた。

「この子、シャーヒンていうの。かわいいでしょ。まだ、ここへ来て四、五カ月の新米なの」と年かきの女性が少女を見せびらかすように紹介した。いかにも自慢の商品、売り物とでもいうように。

少女はか細い声で答えた。「十四歳です。マイメンシンから来たの。父母はいない。家には兄と妹が残っているけど。お客さん? 一日五、六人かしら。毎日二十タカ(約二百円)ぐらいかせぎます」しかし、「この仕事どう思う?」という私の質問には答えず、ただぼろ笑んでいた。そんな質問をしたことを恥じた。こんな幼い、細い体で毎日五、六人の男にセ

ックスサービズをする毎日……。痛ましさがこみあげて、「体を大切にね」とだけいつて、人垣の外へ出た。

警察と一体になっている娼館

ここには約三千人の売春婦が働いていて、その半分は十六歳以下の少女だという。中には九歳の女の子もいた。こんなにも若い売春婦の多いことは第二の衝撃であった。

ふと見ると、警察の制服の体格のよい警官が二人入ってきた。一瞬ギョツとした。ところが、背の高い方の警官が私たちを手招きし、先に立つて建物の中へ入っていく。二階の一室をいきなり開けた。乱れたダブルベッドの上にハーモニウムという手廻しオルガンがあり、哺乳ビンがころがっている。瞳の大きなグラマナ女性が丸裸の赤ん坊を抱いて出てきた。警官とは顔見知りらしく、突然の来訪に驚いた風もなく軽口などたいている。今、客が帰ったばかりのようだが、この赤ん坊をかかえて商売をしているのだ。この部屋は彼女の住まい兼仕事場という。

警官はいかにも楽しげに先導を続け、次々と部屋のドアを開ける。不意打ちに驚いた客の男がはね起きて、ルンギをあわててつけるなどの場面もあった。ある部屋では、ベッドのわきに六、七歳の男の子がぼんやり

していた。心の中で「許して」と叫びながらカメラを向けると、二十代後半ぐらいの女性が花柄のサリーを整えながら、坊やの肩に手をかけて喜んでポーズをとってくれた。ファインダーをのぞいたとき、その母親娼婦のあまりにも暗い表情に胸をつかれた。なんとという淋しげな目。彼女は一言も発しなかった。私も何一つ聞く勇気がなく「サンキュー」とだけいつて部屋をとおび出した。あの淋しい目は今も忘れられない。

子連れ売春婦が珍しくないことは第三の衝撃だった。わが子の目の前で客をとるなどという残酷なことがあるだろうか。「父親を知らない子が多い」と警官がいつた。路地にあふれて客を引く子らもそういう出生が多いのだ。

三階に上ると、端の方にトイレのようなドアが五、六枚並んでいた。乱れ髪の派手なサリーの女性がドアの一つから顔を出した。ドアの中で男の相手をしていて、私たちの足音を聞き何ごとかと思っただけ。自分の部屋で客をとる代りに、こんなトイレぐらいの小部屋を使っているのだった。何といううわびしい性の取引の場だろう。

向い側の似たような娼館に立ち寄ってみた。薄暗い廊下の両側に並んでいる部屋は、中がさらにカーテン

で仕切られて嬌声が聞こえてくる部屋もあった。突き当りの部屋で年か
さの女性がぼんやり客を待っていた。
警官とは馴染みらしく、なれなれし
く口をきいている。今年三十歳のこ
の女性は、コミラから来て、もう八
年。ベテラン娼婦である。「親が死ん
で小さいときによその家に売られて
この世界に入ったの。そりゃこんな
商売やめたいけど、お金がなければ
脱けられないわ」と投げやりな口調
だった。彼女もハーモニウムが得意
で、甘いメロディを弾いてくれた。



6階建ての娼館は昼間からにぎわっていた

小道があつてその両側にニッパ椰子
の粗末な小屋が並び、入口に二、三
人ずつ娼婦がたたずんでいる。何と
いう生気のない疲れた表情だろう。
私たち一行に気づいて中年のやり手
婆風の女性とび出してきて手招き
する。あまりのみずぼらしさにいたた
まれなくなつて、路地に出ると、左
手の二階建の木造の娼家で、四、五
人の女性たちが二階から寄つてらっ
しゃい」と私たちに声をかけてくる。

いくつうがないおばあさん

その向こう隣りのバラックの平家
に目をやると、若い女性が横ずわり
になつてウチワであおいでいる。中
をのぞくと、上半身裸のおばあさん
が土間に横になつていた。灰色の髪
しなだれた乳房、しわだらけの細い
腕……目をつぶつてぐったりしてい
る。若い女性は私たちに気づいてあ
わててサリを上半身に掛けてやつ
た。

「おばあちゃん、少女のころ、
ここへ売られてきて、一生けんめい
かせぎ、のちに、この家のおかみに
雇われた。もう何十年もこの土地に
いる」と若い女性がいった。「ご家族
は？」と老婆に聞いてみた。彼女は
首を振り、「ここが私の家です」とつ
ぶやくようにいった。若い女性は彼
女をいたわるように、ウチワで風を

送り続けた。死を待つ老先輩に対す
る若い娼婦のやさしい心づかいに、
何か救われるような思いがした。

戦前の日本でも

この苦界で人生のほとんどを過ご
し、こうして無一文で死の床につい
ている。といつても小屋のような娼
家のたたきだが、このような幸運い
女の一生はまさに、戦前の日本で貧
しい農村の娘たちが都会の遊廓に売
られて不運な生涯を閉じたのと同じ
ことで、バンガラデシュではそうい
う悲劇が今なお現に起こりつつある
のだ。一生脱けられないという点で
戦前の日本の遊廓にあまりにも酷似
していることが第四の衝撃であつた。

男も女も苦界地獄

この遊廓に遊びに来る客は毎日平
均五千人という。ダッカの男性が多
いが、古くから知られた売春地帯だ
けに、客は全国からやってくる。「こ
こには、色んな階層の人が来るが、
大体は貧乏人だね。女が安いから」
と警官がいった。リキシャ引き（自
転車の後部にカラフルな幌つきの二
人用座席のついたリキシャはダッカ
で最も普及している交通機関で、日雇
い（農民の半分以上は土地なし貧農
なのでダッカに働きにくる）、物売り
（バナナ数房、タバコのバラ売りな

どの行商）……貧しくて結婚もでき
ない底辺の男たちが十タカ（百円）で
も金を握りしめて女を買いに来るの
だ。

「ここでは敵が見えない」まだ二
歳のボランティア青年がボツリと
いった。「日本人観光客が押しかけ
るマニラやバンコクと違って、女も
貧しいけど、来る男も貧しい。救い
がない地獄だ。青年はひどいショッ
クを受けてダッカにもどつてからも
黙りこくつていた。たしかに、観光
客も恐れをなすほど、不潔で陰惨な
苦界、買春観光が入る余地さえない
古典的な売春の世界、ズバリ貧困と
結びついた性の搾取の場である。

「こういうところの娼婦たちは九
〇％以上が貧しいがゆえに春を売る
ことになつた女性たちである。貧困
を生み出す体制を変えない限り、ナ
ランガンジーの遊廓はなくなるな
い。」バンガラデシュ人記者が顔
を暗くした。現場へ行つてみて、そ
の通りだと改めて思った。

しかし、このような観光客も寄
つかない古典的な売春地帯は隣のイ
ンドのボンベイやカルカッタにもあ
つて、もつと大規模で、もつと悲惨
だと聞いた。売春は人類最古の女の
職業」といった論に感嘆されて、女
たちの苦しみを直視せずあきらめて
しまうことが一番こわいと思った。

ベラウ非核憲法と反米基地闘争

ベラウの人々が原発を含むあらゆる
核を拒否する非核憲法を制定した
ことはご存知の方も多いと思う。ス
ペイン、ドイツ、日本、米国と続い
た長い植民地支配の歴史、日米の戦
場とされこうむつた被害、同じミク
ロネシアのマシヤル諸島の米核
実験、そして米国によるベラウ軍事
基地化計画が明らかにするなかで、
ベラウ憲法は、外国の侵略から身
を守り、自分たちのことは自分たちが
決められる社会をつくりたいという
民衆の願いが結実して生まれたとい
える。しかも非核条項にしても「核
の持ち込み等を禁じる」と単にうた
っているのではなく、「住民投票で
四分の三の承認が得られた場合を除
く」と例外規定をもうけ、いざそう
した問題が起きたときに、政府では
なく民衆が住民投票によって最終決
定を下せるようにすることで、これ
を実効的なものにしていく。核に限
らずベラウ憲法では、重要な政治決
定に住民が住民投票を通じて直接参
加できるようにしていることも重要
な柱だ。

この憲法を制定すること自体がベ
ラウ民衆にとってはたたかいで、米

国の強い反対にあつたために三度の
住民投票をへて批准され、八一年一
月に発布にいたつた。しかし米国は
ベラウの軍事基地化をあきらめたわ
けではない。米国の計画とは、ベラ
ウ全土の三〇％近くにあたる広大な
土地を演習場にするこつとや、トライ
ドント原潜の前進基地ともくされるマ
ラル港の基地化、二つの飛行場の
基地化などが、これらを法的に裏
付けるものとして米国が要求してい
るのが自由連合協定の締結である。
自由連合協定とは、日本といえは米
国の権限を拡大した「安保条約」と
いったものだが、自由連合ではベラ
ウの政治的独立さえ奪い、こうした
基地化とともに米国が軍事・安全保
障上の権限を完全に握るものとなつ
ている。

この自由連合協定は、昨年八月に
政府レベルで調印され、さる二月十
日に住民投票に付されたのだが、こ
とが単純でないのは自由連合協定が
単なる基地協定ではなく、五十年間
にわたる米国の財政援助とセットに
なつている点だ。戦後三八年間にわ
たる米国の信託統治下で米国の財政
援助に依存せざるをえないしくみが

つくられており、このためベラウ政
府は自由連合を支持・推進する立場
をとり、今回の住民投票で批准・承
認させるために非常に一方的なキャ
ンペーンをはつた。ベラウ住民の反
対運動は続き、投票前には伝統的な
住民代表といえる酋長たちが反対に
立ちあがるのだが、政府は五〇万ド
ル近くを投入して「自由連合によつ
て米国の財政援助がえられる」とい
つた圧倒的な支持キャンペーンをは
つた。

住民投票の結果は、自由連合協定
全般については承認に必要な過半数
を超え、その中味の核に関しては承
認に必要な七五％をとれなかった。
投票用紙には核に関して七五％以上
の承認が得られない限り自由連合は
発効しないと明記されており、これ
によつて自由連合は明らかに破棄さ
れたことになる。そしてベラウ政府
も投票前にはそのような見解を表明
していた。ところが投票後、米国は
自由連合は承認されたのだからこれ
が発効できるようにベラウ憲法を変
えろと要求し、ベラウ政府は核に関
する条項を除いた部分を自由連合協
定として発効せよと動き始めたの
だ（ここぞという核に関する条項に
は米軍基地化を決めた部分は含まれ
ていない）。

荒川俊児（自主講座）

悲しみを裁けますか

—中絶禁止への反問—（送料二五〇円）

定価九八〇円
三二二ページ

優生保護法「改正」問題を女の立場から考える。
学習会、討論会などに絶好の参考書！

中絶は語られない歴史であった。それだけ性、とりわけ女の性は闇
に閉じこめられ、為政者に管理されてきた。再びその管理が強まろう
としているいまこそ、わたしたちが生きているうえで性とは何かを見つめ、
男と女の関係を問ひ直すなかで、「産むこと・産まないこと」を、たし
かに自分のものとしていく必要があるのではないか——編者より

手記・わたしにとって中絶とは／座談会—中絶は法で罰すべきか／
現場からのレポート／資料・家族計画史年表など
青木やよひ・丸本百合子・山本直英・一条ふみ・我妻 堯・北沢杏子ほか

編集 (社)日本家族計画連盟
03(269)2101 内線650/414
発行 人間の科学社 03(813)5271

アジア・フェミニスト・ニュース

◆フィリピン◆

幼い売春者

フィリピンではどんな季節でも子供たちは働いている。マニラの街をぶらつき、エルミタの盛り場でおしやべりをした後、二二ドルを稼ぐために、知らない男と薄汚れたベッドの上ですすす。「お母さんにはデパートで働いていると言ってる」だけれどお母さんは泣いてばかりいる。鹿のような目をした一五才の少女は決して泣かないように見えた。彼女は何百という児童売春者の一人にすぎない。警察は最近、一〇才一五才の子供を捕縛したし、地方の病院では九才そこそこの少女たちの性病を治療している。

彼女はあばら屋に、未亡人の母親と、一〇人の弟妹、いとこたちと住んでいる。彼女は自分の稼ぎでひと月一ドルの家賃を払っているが、一三才になる妹も売春婦に仕込まないので、今では一家の稼ぎ手が二人になった。

マニラでは子供の売春は今やエルミタの夜にすっかり定着し、それに反対する民衆の圧力は強まっている。人々は少年の売春がだんだん増えていることを心配している。「五年前、ここにはホモはほとんどいなかったのに、今じゃ多勢いる」とベテランの売春婦は言う。売春人口の約半分以上を占めると言う子供たちは、とても小さく、とても幼い少年たちである。

児童売春に対する警察の取り締まりも厳しくなっている。旅行者の多いバグサンジャンでは、ポルノ映画に出演させる少年を集めていた五人のヨーロッパ人を国外追放した。また旅行省は、保護者を同伴しない未成年者のホテルへの出入を禁止する法律を出した。しかし、政府は観光客が減ることを憂慮しており、この法律の実施は困難であろうとみられる。(ニューズウィーク 一九八三・一・二四より/N・U)

◆フィリピン◆

軍情報部による強姦事件

先頃、フィリピン滞在中の一会員が、三月二十四日にミンダナオ島ダバオで起きた強姦事件を伝える資料を送ってきた。同日の深夜、軍情報部に逮捕された四人が目隠しをされ手錠をはめられて連れて行かれた場所、尋問の途中、強姦されたのである。

そのひとりヒルダ・ナルシソによれば、みな別々に連行され、一〇人の男たちに交替で尋問され、知っていることをはけ、党員の名をあげると脅されたが、その間も彼らはたえず身体をなでまわした。ヒルダは遠くの方で仲間の叫び声を耳にしたとある。

◆インド◆

夫による持参金殺人

一九八二年三月十八日付の新聞に、どく腐乱しており、首に一本のローニューデリー駅で、麻袋の中から若い女の死体が発見されたという記事が載った。記事によると、死体はひ

一〇日後、女の身元はサハラプー

ルのラム・Maheshwarと判明した。

捜査の結果、ラムの夫がより多額の持参金を求めたあげく、それがかなえられないため、両親兄弟姉妹と謀ってラムを殺し、死体を始末しようとしたことが明らかになった。夫のAsok Kumarは次の結婚話があったらしいという証言もある。彼らは、ラムが高額装身具類を持ち出したという話をでっちあげていたが、それらは夫の家から発見された。

◆タイ◆

タイの出稼ぎ女性問題

タイ女性の海外出稼ぎ売春をめぐって、各国がその現状や実態を伝えている。バンコク共同通信によれば、出稼ぎ先は上から順に①ギリシャ②ドイツ③日本④シンガポール。

シンガポールの「ストレイト・タイムズ」は八二年十二月中のタイ女性の集団検挙・送還を次のように報じている。「五百人のタイ・コルガールをクワート・ピア港の売春拠点で検挙(十一月九日)」。百五十四人をタイへ送還(十一月十一日)。「アンソン・ロード地区のナイト・クラブで二十一人を検挙(十二月十九日)」。シンガポールへの出稼ぎが多い理由は「アセアン諸国内は二週間ノビザ、旅費もクワラルンプール経

由の陸路で五十ドル弱ですむ」など。

一方、中東男性が押しかける「国際買春国」ギリシャでは、タイ少女の大使館かけ込み事件が起きた。ハ

二年十月一日付「バンコク・ポスト」によれば、「十三人のタイ少女がレストランのウェイトレスとの条件でアテナに行つたが、実際は売春を強要され、断つた者は売春婦旋人に暴行された」。ギリシャ政府は「現在、国内で三千人のタイ女性が働いている。いくら入国後の労働条件の悪さ

や危険性を説いても、毎日入国申請が引きも切らない。読み書きすらできない少女もあり、大半の女性が英語で書かれた申請書の内容を理解できない」と話している。(U・T)

◆アメリカ⇄アジア◆

デポ解禁を許すな!

六月初め、アメリカで強力避妊薬デポ・プロベラの「安全宣言」がなされ、解禁も近いのではないかと報道があった。一回の注射で、三、六カ月も排卵を止めるこのデポ・プロベラについては、八一年に本誌一号でとりあげたが、現在もこの薬の売り方、使われ方は当時と変わっていない。

アメリカの食品医薬品局(FDA)は、発ガン性の立証により、デポを使用禁止としているが、このたび、ガンと関連ない発表したのは、ジョージア州アトランタのグラディ記念病院家族計画クリニックである。

ここで一三年間に五〇〇人以上の女性(黒人女性)に対して臨床試験をした結果が、この「安全宣言」というわけである。FDAが禁止しているにもかかわらず、医師はデポを勧める。アメリカ国内にはかなり普及しているのが現状である。

ワシントンに本部をおく婦人保健連合(NWH)は、デポの副作用に悩んでいる六〇〇人以上の署名を集め、製造元のアップジョン社に対し、訴訟を起こすことを予定している。デポの副作用には、吐き気、頭

痛、目まい、疲労、手足の痛み、胸やけ、生理不順、病的な肥満、高血圧、抜け毛などがあり、また病気に

対する抵抗力が弱まり、脳・肺の血栓症が起きやすく、乳ガン・子宮ガンにかかりやすくなるという。ビル

のように毎日飲むとか、他の避妊方法より便利というだけで、使用者自身はもちろん、子供にも影響しないとは断言できない危険な薬の製造・販売を許してはならない。

デポを第三世界へ強力で売りつける根拠をしているアメリカの国際開発局(AID)元職員は、人口爆発は革命を引き起こすことになる。AIDはデポを避妊の強力な武器に加えることを願っている」と語っている。AFDのデポ解禁を当て込んで、アップジョン社の株価は上昇しているが、薬を政治的に利用し、また経済的利益のみを追う国や企業の責任は大きい。

デポとガンの因果関係が証明されないことが、即「安全」には結びつかないことは、キノホルムとスモン病の例をあげるまでもない。FDAがデポ解禁を許さないことを訴える。(ガーディアン 83.1.26より/T・S)

四月に開かれた国際消費者セミナーに参加するため来日したフィリピンのタベラさん、マレーシアのエプリン・ホンさんと交流会を持ちました。お二人とは、買春観光・人権問題等の運動を通じて情報の交換をしており、話し合う機会を持てたことは大変嬉しいことでした。

タベラさんはフィリピンのAKAP（民衆の保健運動）会長、銀髪のドクター。

「私は、ありとあらゆるグループ、人権、労働者、女性、消費者、宗教者、教育者、などのグループに関わっているのですが全ては絡みあった問題なのです。各々の「症候」は一つの「病気」から出ています。例えば健康の問題は経済と重なっています。私達の国の状況は不公平ですから、



前列右より2人目 エプリンさん 3人目 タベラさん

へ出てくれば法律の保護もなく、工場で徹底的に搾取される。性的な脅しもある。西欧近代化によって女の状況はむしろ悪くなったのです。

八〇年十一月朝日新聞にも出たような、ペナンの日本電機工場で女子労働者が集団ヒステリー事件」は頻繁に起こるし、一つの異議申し立てとも言えます。農村から都会へ出て強い疎外・抑圧を受け、きつい労働条件。ストライキは禁止されていますが、この事件は一種の労働運動ではないでしょうか。

CAPでは医者、科学者、経済、法律など専門知識のある人と一緒に活動しています。ビル、デポプロベラのこと。キノホルムがまだ店頭で売られていることなどマスコミを通じて知らせています。しかし例えばポイコット運動を組織するなどは、的確な表現をする技術もいるし、そこまで至りません。民族による性差別の違いもあります教師など女性の職場進出もふえています。

一緒にやれること、例えば多国籍企業が何をしているかなど、一国レベルでなく、アジアの女として力を合わせていけることはたくさんあると思います。」（まとめ・小山千鶴子）

多数の貧しい人が栄養失調や病気に苦しんでいるのに、政府は軍事費で予算の半分四十億ペソも使っている。政府の敵はフィリピン人民そのものです。人民を殺すために巨額の金を使っている。私は買春観光にも反対しましたが日本人への批判よりも米軍基地、そこでの買春も大きな問題です。レイテ島・サマル島という最貧地帯の出身者が売春をしています。今年秋にはマニラで反米軍基地国際集会を開く予定で、統一戦線を組みます。児童にも麻薬、性病の悪影響が出ていますし、「人間の尊厳を奪うもの」として基地の大きなツケが民衆にまわっています。

AKAPの運動は、組織づくり、意識を変え、動かしていく民衆の運動そのものです。医者が足りないのでも七割の人間は一生に一度も医者にかからない。だから人々が自分で健康を管理していくことが大事で、その過程で共同で何かをすることを学び、民主主義の健全な基盤を発見していきます。栄養士・農業養豚など専門知識をもった人々と協力して、

アジアの女性の運動から

フィリピンでは今、「内戦状態」ともいえるわけで人民は生死をかけて闘っている。何故闘うか、それが人民の意志だからです。連帯することの意味は、私達はフィリピンで、あなた方日本人は日本で闘いに立つということでしょう。

エプリンさんはCAP（ペナン消費者協会）婦人部スタッフ。32才。この仕事をやりがいのある仕事として考え選んだという。

「CAPは民間非営利団体です。マレーシアの国は西欧近代化・工業化

プライマリケアの知識、薬草、針、灸などの役立つ知識を共有すべきなのです。絵本や布芝居で子供に教え、親にも伝えていくという風になっています。私は結核の専門医でしたが戒厳令下で結核協会から追われました。結核、病率が高まるためには新薬というより労働条件の改善などが効果的です。医療の問題は社会・経済的な問題だということをよく示しているのは水です。上水・下水設備を完全にすれば子供の死亡の七割は減るのです。

をめざし、首相は「ルックイースト」を打ち出しているのですが、そこから出てくるはずの大きな、三つの問題を抱えています。第一に食糧、衛生、住居、健康という基本的人権を多くの人々が奪われていること。第二に環境、資源、自然で、例えば、六割の人がトイレも飲み水もない状態におかれているため、川が汚れることは死活問題です。森林も、輸出で木をきりたおしたあとは、洪水・荒地化といったことが起きる。第三に所得不均等からくる問題。第三世界と先進国の関係では、世界の富の八割を握る二割の人々に仕え支配される。彼らの現在の生活水準を維持するために、我々は石ケンの原料であるパーム油を輸出する。しかしマレーシア国内では石ケンは手に入らない。魚でも同じです。国内でもごく少数のエリートと圧倒的多数の貧しい大衆という構図で、「植民地根性」が培われてきた上、西欧型ライフスタイルがよいと錯覚する。母乳でなく粉ミルク、おやつにスナック菓子・インスタントラーメン。TVカセットなど購読欲・消費欲も煽られています。母親の責任、女の役割は重要です。もともと農村部では女の決定権もあり、地位としては強かったのですが農村経済が変化してきて相対的に弱まった。やむなく都会

海外資料紹介

「女たちは固定したイメージをうち破ろう」

メディアの女性に対する暴力、性的搾取を第三世界の女性の視点で告発した「Abuse of Women」という小冊子がペナン消費者協会から出された。著者は買春観光の記事（機関誌8号）などですでにおなじみのエプリン・ホンさんである。「今日の人々の考え、態度、価値観、生活様式を形成する最も有力な道具は何か、と問われれば、それはマスメディアである、と答える」。こう書きだされる

本書は広告、ポルノ、買春観光、女性雑誌、小説、ユーモア、テレビ、映画、新聞報道の項目にそって具体例を用いながら、いかに女性が無知、単純でかつ性的刺激を与えるだけの存在として描かれているかを説く。

広告、ポルノ、買春では性そのものが商品とされている現状、そして雑誌、小説、映画などでは女性に押しつけられる役割分業の問題など、ポルノ的女性像が街に氾らんする中で生きる私たちにとつてどの指摘も全くそうだとつなげる。「ユーモアは理性的な論争が破綻したとき私たちがおとしめ、侮辱し、打ちまかすために用いられる」と言い「ユーモアや冗談の中にこそ男のホンネが出

る」という。又女性に関する新聞報道は美人コンテストからファッションそして強姦事件であり、特に後者は興味本位にセンセーショナルにとりあげられるため、女性に無力感と恐怖心をおこさせるだけだという。

女のおかれた状況は日本もマレーシアもそれ程変わらない、と思わせる。しかし違うのは、マレーシアが第三世界に属し、その第三世界のメディアを支配しているのが多国籍企業である点だ。マレーシアでは日常人々の目にする映画、テレビの七十一%が西洋からの輸入であるという。西洋の消費生活様式と共に男中心の差別的な女性観が流入してくる。事実、本書に批判の対象としてとりあげられている具体例も「ブロンディ」その他の欧米コミック、ロマンス小説の「ミルス・アンド・ブーン」、アメリカのタバコ、ウインストンの宣伝、日本のナショナルやシンガーの宣伝、テレビ番組の「ダラス」や「チャリィス・エンジェル」など外国のものが多い。と同時に引用文献の中に、

地元の新聞記事や雑誌にまざって欧米の研究書や雑誌記事、女性解放グループの機関誌が多いことにも気づく。

最後に、消費者協会の具体的な提案として、あらゆる女性グループが差別的な広告に対し反対キャンペーンをはかること、ジャーナリズムに従事する女性は現実的な女性像を積極的に描き、発言権を増すこと、政府は女性の地位向上のための自らの役割を自覚し、又、差別的なコマーションを禁止すること、企業は差別表現を自己規制すること、女子の教育の問題など八項目をあげ、女性には勿論男性にもよびかける。

全文七十七ページの中で写真にもかなりスペースをさきながら問題を八項目にも分けて論じているため十分語りつくしていない感もあるが本書が目的としている「問題意識を深めるきっかけ」にはなっていると思う。題名中の単語 Abuse は乱用、悪用、誤用、虐待、酷使という意味で人又はものを否定的意味あいて用いることだが、びつたりの日本語訳が思いつかない。適切な訳語を摸索しながらグループで読み合うと良いと思う。（大石まゆみ）

紹介した本を御希望の方は八〇〇円分の切手を同封のうえ「アジアの女たちの会」まで

26

社会構造——経済・政治・文化

分の墓をほらせて殺害しました。日本軍が家に侵入してくれば女性は強姦されるということがしばしばあり、女性たちは日本軍が来たら隠れ恐怖でふるえていたという。戦争の末期になり、追いつめられてくるこうした残虐行為はますますエスカレート、例えば、赤ちゃんをぼう

りあげて銃剣でさしたというような話も聞いています。

終戦後、米軍が再びフィリピンに帰つて来ました。私たちは米軍をす

人を好意をもって見る事ができま
せんでした。日本軍の占領の期間は
短かったのですが、その間になされ

たちの心の中に刻みこまれていたか。

らです。ここにいらっしやる方は若い方ばかりで、戦争中のことは御存知ないと思いますし、本当は言いたくないことなのですが、日本軍がいかに残酷だったか少しふれてみたいただ頭を下げなかったためにたたかれるとか、灼熱の太陽のもとに立たれるとか、抗日戦のゲリラには自

ンで戦われたアメリカの戦争だったのです。そして私たち、フィリピン人がアメリカに対して非常に腹だたしく思うことの一つには、アメリカの犠牲になりながら戦争の損害を補償してもらっていないという事実があります。

って決められるということです。例えば、私たちが本当に必要なものは米なのですが、こうした食べるものの代わりに現金作物―砂糖、コブラ、ココナッツ、タバコ等を第一世界のために私たちは何百年もの間植へつづけてきて、買い取る値段も加工して売られてくる値段も彼らが決めて

軍基地なのですが、こうした軍事基地の存在は、アメリカがいかに軍事的介入をしているかを象徴しています。私は先週、ワシントンでアメリカの議員に会い次の二つのことを要請しました。それはマルコス政権に軍事費を与えるということと近い将来、自分たちの運命を自分たちの手で選びとる民族自決の闘いがおきた時アメリカは介入しないで欲しいということです。でも現実には、アメリカは介入していて、例えばグリーンベレーは、軍隊や警察をワシントンに及び、反乱やストライキの収め方、政治犯への拷問の方法を教えているのです。フィリピンの核の問

今、政府は最初の原発を建設しようとしていますが、このために、アメリカの輸出入銀行から一九億ドル借りなければならぬ。そしてこのお金は米国のウェスティングハウスの社に払われ、原発でできた電力は

クラーク空軍基地とスービック海軍基地という米軍とバターン輸出加工区の日米多国籍企業のために使われるのです。政府は実におろかなことをしています。

次に、ニパーセントの人がマスコミ・教育・教会といった文化的構造をも支配していることにふれましょう。政府はマスコミを支配し、自分達

八〇パーセント以上の女性は、農村地帯にいます。特に農村の女性は、何重もの抑圧を受けている。家事をし畑で働き、できた農作物を市場に売りにいきます。夫と妻の関係も封建的なものがあり、小作人である夫は自らが地主から受ける抑圧を、妻に転嫁しているのです。都市に住む女性たちも非常に安い賃金で働いています。こうした貧しい人々が、何とかして現金を手に入れようとしているところに、日本、アメリカやドイツから買春観光客がやってくるのです。シリピンでは、買春問題はまず経済・政治的な問題であり、道徳的な問題ではないのです。

日本とシリピンでの買春観光反

の運動もあり 昨年（八一年）は

母は四〇パーセント減りました。しかし、フィリピンに来るかわりに台湾、韓国、タイへ行くことになれば、運動をすすめていくためにはこれらの国々の女性と手を取り合うことが必要だと思います。

とに、むしろ私たちは誇りを感じます。私たちは今初めて受け身ではない私たちの歴史を作っていく、そういう瞬間に生きているからです。

私たちの活動報告

五島 昌子

三月一三日、「優生保護法改悪阻止集会」が阻止連絡会の呼びかけで東京・代々木公園で開かれる。

あいにくのどしゃぶり、春とはいえ、寒さにふるえながら、三時間近い時間をさまざまなグループのアピールに、傘を握りしめた手で拍手。

大きな声で賛同の意志表示（大声を出す）と体が暖まる。強い風と寒さで冷えきった体をスクラムで暖めながらのデモ行進。女は本当に辛抱強い

としみじみ思い、この力で優生保護法改悪案の上げは阻止できるのではないかと実感しましたが、政府自民党と一部の宗教団体は、決して手をこまねいてはいません。差別に直結している「優生思想」打破のため、ねばり強く闘いましょう。

五月五日、夏をおもわせる青空のひろがった、こどもの日。東京・日本教育会館で「なしくずし改憲を許さない女たちの集会」（主催・戦争への道を許さない女たちの連絡会）が開かれました。「平和な社会を子

らに渡す責任がある」（山崎朋子さんの発言）。子づれの女たちの参加がめだちました。アジアの女たちの会

も「憲法第九条を守ることがアジアへの連帯につながる」とアピール、「会」の国籍法研究グループは「国籍における男女平等が子どもの基本的人権を確立する」と訴え、三〇余りの女性解放、反戦・平和のために行動するグループが、それぞれの立場でアピール。女たちの闘いの輪をさまざまな場で拡げていくことを誓い合いました。

五月二七日、「光州三周年への集い」を「会」の主催で、上智大学の教室を借りて開催。

金芝河の詩によるスライド「しばられた手の祈り」。和田春樹さんの講演「歴史の中の陣痛——光州事件——」。新屋英子さんのひとり芝居「身世打鈴」。現在の光州の状況報告、フィリピン「政治犯」として捕われている人びとからのアピール。富山妙子さんの絵による映画「自由光州・一九八〇年五月」の上映、と盛りだくさんのプログラム。

光州で何が起きたのか、私たちはあの、民衆への虐殺行為を決して、忘れない。新たな装いのもとに進行している、日・米・韓の動向に対し

て、私たちの政府のあり方、ますます悪くなっている私たちの状況を変える努力を続けていくことをあらためて確認する集いでした。上智大学の学生たちの協力、いい男たちがたくさん集まってくれた——手伝ってくれた——ことに感謝します。定員三百名の教室は席がたりないほどの盛況でした。

六月一九日、「安保をつぶせ／中曽根を沈めよう／六月行動」の集会とデモが代々木公園で開かれる。主催の実行委員会には、幅広い層から百五十を超える団体、個人が参加、私たちの「会」も参加。約四千人の人びとが集まり、色とりどりのゼッケン、プラカード、風船が梅雨の幕間の日ざしの中でゆれていました。

参議院選挙のさ中の集会でしたが、私たちの願いとはほど遠い選挙結果。「不沈空母」と豪語する水先案内人に引きずられて、一寸先きは暗の中に突き進んでいく日本。押しつぶされない力を貯え、ひるまず反撃を続けていきたい。



富山妙子 1800円
はじけ！
鳳仙花

—美と生への問い—
炭鉱をテーマとして絵を描き、第三世界、韓国へと、常に生きることを表現することの意味を求めて女ひとり体当りで生きてきた画家の、自らの歩みの跡を確かめた記録。『わたしの解放』増補版。

満州・その幻の国ゆえに 林郁

—中国残留妻と孤児の記録—
楽土から地獄へ暗転した満州で、集団自決を生き延び、いまだ戦後なき日々を送る人々の苛酷な運命を追った壮絶な記録。1200円

女性解放思想史 水田珠枝

真の女性解放とは何か。現代の課題をふまえ、近代西欧女性解放思想の形成過程を考察。2900円

筑摩書房 東京神田小川町2-18
〒101 03(29) 17651

ひろば

自分をとりまくさまざまな問題を考えるとき、アジアの片すみにある自分、女としての自分を意識しないでは、どんな問題も宙にういてしまう気が致します。「会」に参加したく、年会費を送ります。

(西宮 M・C)

間でやります。

(大津 I・M)

私は今、工芸・陶芸をしています。月一回、ヒカリノサトという障害者施設で、みんなで楽しく粘土いじりをしています。そこでは野菜のほとんどを作っています。しかも無農薬で。ここを訪れるようになり、いろんなことを考える様になりました。そして、神戸の学生青年センターの食品公害セミナーで、アジアの女たちの会の雑誌を見つけた。これからは、生活運動という形で、身の回りから少しずつ考えてゆき、食物、農業のことだけでなく、広い視野で見ていきたいと思っています。

(大阪 M・C)

西ベルリン在住の者ですが、休暇で鹿児島に帰ってきています。西ベルリンで会員の方から貴誌のことを

あれもこれもやりたいと動き回っていた二十代も過ぎ、息長く、確かな運動を、いま住むこの地でと思うようになりました。子供を育て、職業をもち、なかなか語り合い、行動する機会もありませんが、今回の陳情をきっかけに、自分の生き方も含め、婦人運動に取り組んでゆきたいと思っています。今後の私たちの運

二月二十六日、友人二名と私との連名で、私たちの住む与野市に対し、優性保護法「改正」への反対決議を関係機関に提出するよう陳情しました。現在、その後の行動として、署名、請願に向けてスタートしたところです。

(西ベルリン H・L)

動のため、御意見をいただければ幸いです。 (連絡先IIアジアの女たちの会)

(与野 R・W)

「アジア修道女会議」(第六回、通称AMOR)がさる四月、台湾の彰化で十一カ国から約四十人の代表者を集めて開催された。

これは、アジアの修道女の自由な運動として、アジア諸国の問題を共に考え、取り組むことを目的に、七一年からアジア各地で開かれている。今回のテーマは「アジアにおける女性の搾取」。会議では体験学習、女性問題を中心にした国別レポート、ケース・スタディーなどの後、次のような誓言文を採択した。

「アジア諸国がとっている新しい経済政策は、アジア女性の伝統的生活パターンに著しい影響を与えています。特に経済的、性的搾取と不平等の点で重くびきの下にあります。そのため私たちは①アジアの女性と連帯し、正義と平和の促進への努力をする②神が創造の時に女性に与えられた尊厳をふたたびとり戻す③社会分析、社会の現実を信仰の目で見批判的考察を行う——など」

(東京 I・N)

活動報告

(1983年1月～6月)

- 1・18 女大学「アメリカの軍事戦略と基地売春—沖縄・フィリピン・タイ」遠野はるひ・新里智子
- 2・18 女大学「従軍慰安婦にされた女たち」山口明子・五島昌子
- 3・13 「優性保護法改悪阻止全国総決起集会」に参加
- 3・16 女大学「輸入される女たち」三好亜矢子・塚本由美
- 4・10 ザイーニさん(マレーシア)を囲んで
- 4・13 タベラさん(フィリピン)エブリン・フォンさん(マレーシア)を囲んで
- 4・20 女大学「優性保護法改悪をめぐって」草野いづみ・川崎圭子
- 5・5 「なしくずし改憲を許さない女たちの集会」に参加
- 5・18 女大学「国籍法は現在—改正中間試案をめぐって」石田玲子・安江とも子・森本和美
- 5・27 「光州三周年への集い—あの日わたしたちの心は燃えあがった」を開催
- 6・15 女大学「新“家族制度”を考える」はた由美子・佐々木智子・原あき子
- 6・19 「安保をつぶせ！中曽根を沈めよう！6月行動」に参加

'83秋期「女大学」アジアの人権と私たち

アジアの人権はいま、どのような状況にあるのか。とくに私たちの人権は？ 日本そして日本人は、その状況とどうかわり合っているのか。私たちにできることは？ 語られることの少ない真実にこだわりつつ、共に考えてゆきたいと思います。

第1回 9月21日(水)「今、アジアで女たちは」
—人権問題を通して、女性解放を考える—
報告 加地 永都子さん

第2回 10月26日(水)「韓国ではいま」

第3回 11月16日(水)「台湾ではいま」

第4回 12月21日(水)「フィリピンではいま」

場 所 渋谷勤労福祉会館 渋谷駅下車バルコ向い

参加費 500円(会員300円) 午後6時半～9時

機関誌「アジアと女性解放」

- | | | |
|------|-----------------|-------|
| 第1号 | 韓国民主化闘争の女たち | 300円★ |
| 第2号 | 買春観光を許すな！ | 300円★ |
| 第3号 | 日本企業は海外で何をしているか | 300円★ |
| 第4号 | アジアへの文化侵略 | 300円★ |
| 第5号 | いま戦争責任を考える | 300円★ |
| 第6号 | アジアの闘う女たち | 400円 |
| 第7号 | 女と国籍 | 300円★ |
| 第8号 | 続・買春観光を許すな！ | 400円★ |
| 第9号 | 第三世界の女と私たち | 400円 |
| 第10号 | 光州一周年によせて | 400円 |
| 第11号 | 特集・暮らしの中のアジア | 400円 |
| 第12号 | 特集・戦争と私たちとアジア | 400円 |
| 第13号 | 特集・8.15とアジア | 400円 |

★印は残部がありません。送料は1部170円です。郵便振替か切手代用(60円切手)で申し込んで下さい。郵便振替 東京0-46143

ASIAN WOMEN'S LIBERATION English Edition Now Available!

No.1 Asia and Women's Liberation

No.2 Japanese Economic Invasion

No.3 Prostitution Tourism

No.4 Asian Women in Struggle

No.5 Blown by The Winds of Asia

Price: Inside Japan No.1-¥300,

No.2, No.3-¥400

Address(for Order):

Asian Women's Association
Poste Restante Miyamasuzaka Post Office
Shibuya-ku, Tokyo, Japan

あなたも会員になりませんか？

★私たちの機関誌も今回で14号になりました。これは第2号・第8号の特集「買春観光を許すな」の延長線上にあるテーマです。現代の複雑化した社会を反映して買春の構造もより複雑になっており、そうした構造を多面的に追求したと思っております。みなさんの活動や日常生活を考えうるえでも、ぜひ一読してお役立て下さい。

また、私たちの会では、11月23日に買春に反対する集会を開くために準備しております。ぜひ、多くの方々の参加をお願いします。

★私たちの会も発足6年目をむかえ、活動も本格化しています。それに伴ない財政がひっ迫しております。ぜひ、機関誌を一人10冊まとめて買い、友人、知人に売ってください。

★年間会費は3500円です。会員には機関誌、ニュースレターを送るほか、会合のお知らせも随時しています。勉強会にも参加できます。

★会員の申込みは下記まで

東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号

★お願い 財政がひっ迫しておりますので、まだ年会費3500円を、振込んでない方は下記まで至急お振込み下さい。ご協力をお願い致します。

送付先 アジアの女たちの会

新住所 東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号

郵便振替 東京=0-46143

■連絡先が上記に変わりました。よろしく！

編集後記

★11月23日に「輸入される女性たち」の反対集会を開きます。一緒に行動しましょう。(Y・T)
★男中心の社会を変えない限り、買春の構造も変わらないと、つくづく思う今日この頃です。この機関誌を読んで少しでも買春の実態を知って欲しい、とくに女たちには……(Y・S)
★五月から編集をはじめ四ヶ月、おなかの中にいた赤ちゃんがもう三ヶ月になります。男の子ですが、胎教できつと買春はしないと聞きますが……(H・T)
★反買春の運動のよりどころとなつてほしいデス。買春の形は新しい。変えなければ!! (C・O)

定価
1200円

教科書に書かれなかった戦争

付・戦争豆事典

玉碎・皇民化教育・宮城道雄・王道楽士
討匪行・大政翼賛会・大本営・教育勅語
憲兵隊・シベリア抑留・歩哨線・軍法会議・特務機関他70語

付・アジアの教科書

JCA出版 東京都千代田区神田神保町1-42
☎03(292)0401 振替東京7-147755

アジアの女たちの会

8・15とアジアグループ(アジア文化フォーラム)編

去年の夏、文部省の教科書検定(「侵略」にクレーム)に対してアジア各地から抗議の声がまき起こった。「皇軍はアジアで何をしたか」教科書から「侵略」が消えるならば、私たちは自分たちの手で、事実を掘り起こし、歴史化していく作業を続けなければならない。

多くの人々、とりわけ戦争を知らない若い世代にこの一冊を贈りたい。